

福岡市

# 重要遺跡確認調査報告書 I

— 裝飾古墳・吉武K7号墳 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第68集



1981

福岡市教育委員会

## 重要遺跡確認調査報告書 1 正誤表

真	行	誤	正
例書	8	白石公雄	白石公高
1	5	封壙	封頸
17	Tab.2	K7.5 小さく折りよげ嘴状を K7.9 つまみは扁平で	小さく折りよげ嘴状を つまみは扁平で
"	"		
19	40	上級した	上述した
27	15	「終末の群集墳」	「終期の群集墳」

P18のFig. 15に印刷のズレがありましたので、下記のとおり訂正します。

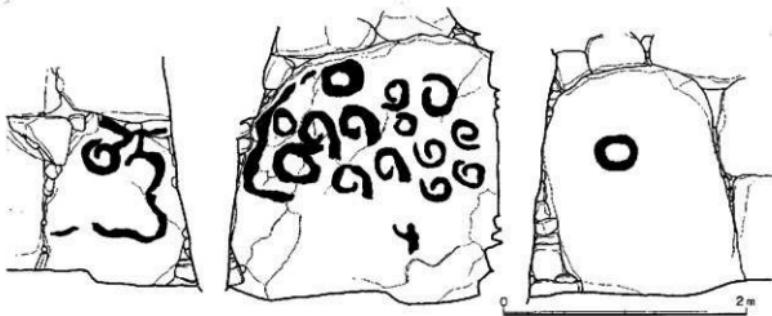
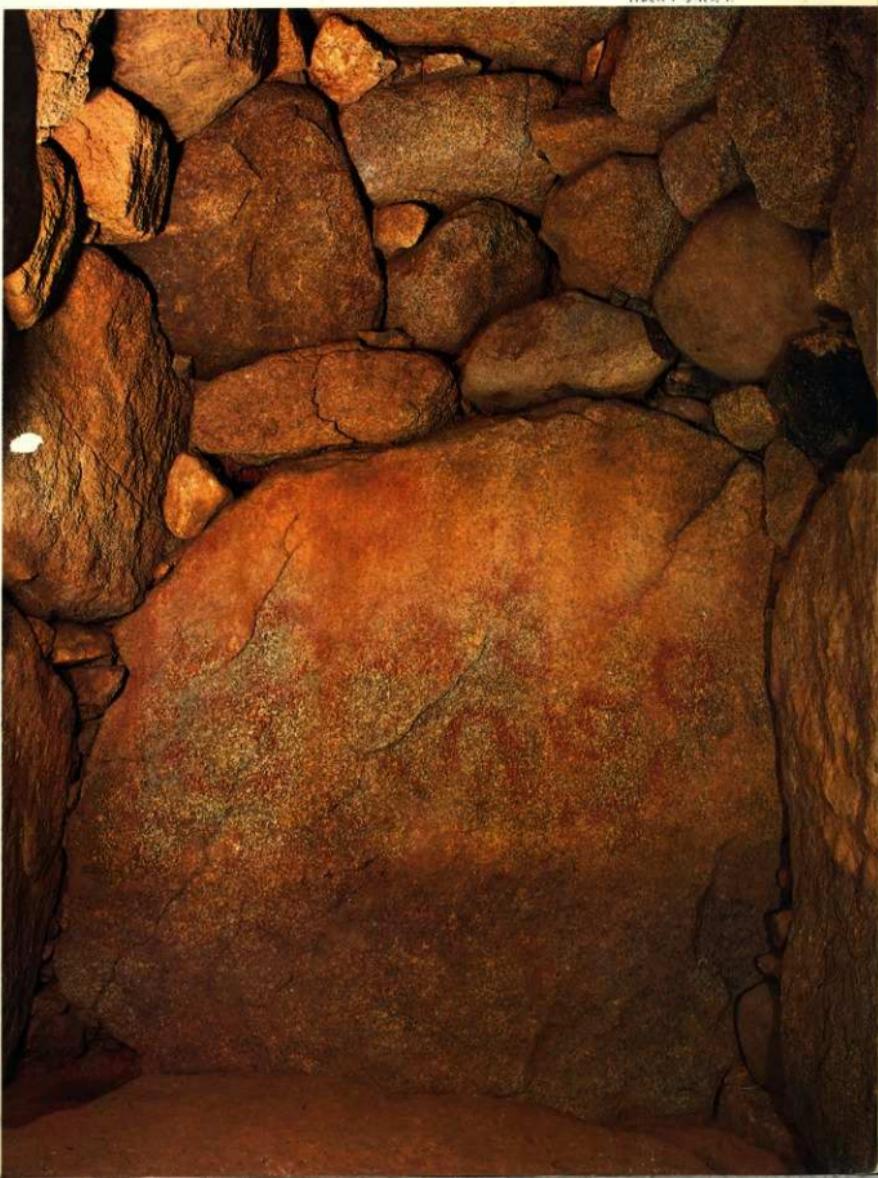


Fig. 15 吉武K7号墳の復元図 (36)

卷首圖版  
吉武K7號墳墓壁



## 刊 行 の 辞

福岡市の西部、西区宝見川の西岸は、豊かな田園風景とともに数多くの埋蔵文化財が残された地域です。とくに飯盛山の山麓部一帯には、多数の遺跡や古墳が今日にいたるまでその姿をとどめ、早良平野の古代史を考えるうえで貴重な遺産となっています。

このたび調査を実施しました吉武K7号墳は、飯盛山の南側にあって、早良平野で唯一の装飾古墳です。それは、横穴式石室の壁面に赤一色で原始文様と人物像が描かれたものです。古代の人々が何を想い、何のために絵画を描いたのでしょうか。今の私達にそれを知ることはできませんが、素朴で力強い精神を感じとることができると思います。

本書が、市民各位の文化財保護思想の育成に活用されるとともに、学術研究の分野において役立つことを願うものです。

なお調査にあたりまして、指導をいただいた先生方をはじめ、地元関係者各位の多大のご協力と、文化財に対するご理解に深甚なる感謝の意を表します。

昭和56年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 西津茂美

## 例　　言

- 1 本書は、西区吉武に所在する装飾古墳（吉武K7号墳）と周辺古墳（K6～9号墳）の調査報告書である。
- 2 調査は、重要遺跡確認調査として国庫補助を受け、昭和54・55年の2年度にわたって福岡市教育委員会が実施した。
- 3 本書に掲載する遺構の実測図は、柳沢一男・横山邦徳・吉原淹雄・小林義彦・渡辺和子が作成し、柳沢が墨書きした。
- 4 遺物の整理・実測は、主に小林が行い、柳沢が補った。
- 5 掲載した写真のうち、巻首図版（カラー）は白石公雄氏、他は柳沢が撮影した。
- 6 本書に使用する方位は、すべて磁針方位である。真北からの偏差は西偏 $6^{\circ}40'$ である。
- 7 本書の執筆・編集は柳沢が担当した。

## 本文目次

	頁
I はじめに .....	1
II 古墳の位置と環境 .....	2
III 吉武K群の調査内容 .....	4
1 K群の概要 .....	4
2 K 6号墳 .....	7
3 K 7号墳 .....	9
4 K 8号墳 .....	13
5 K 9号墳 .....	15
IV 吉武K 7号墳の壁画装饰 .....	18
V 金武古墳群の構成 .....	20
VI おわりに .....	28

## 挿図目次

	頁
Fig. 1 早良平野の古墳群・鉄津出土地分布図(%) .....	3
Fig. 2 金武古墳群分布図(%) .....	5
Fig. 3 吉武K 6 ~ 9号墳地形測量図 .....	6
Fig. 4 古武K 6号墳墳丘測量図(%) .....	7
Fig. 5 吉武K 6号墳出土遺物実測図 .....	8
Fig. 6 吉武K 6号墳石室実測図(%) .....	8
Fig. 7 吉武K 7号墳墳丘測量図(%) .....	9
Fig. 8 吉武K 7号墳石室実測図(%) .....	11
Fig. 9 吉武K 7 ~ 8号墳出土遺物実測図 .....	12
Fig. 10 吉武K 8号墳墳丘測量図(%) .....	13
Fig. 11 吉武K 8号墳石室実測図(%) .....	14
Fig. 12 古武K 9号墳墳丘測量図(%) .....	15
Fig. 13 吉武K 9号墳出土遺物実測図 .....	16
Fig. 14 吉武K 9号墳石室実測図(%) .....	17
Fig. 15 吉武K 7号墳の壁画装饰(%) .....	18
Fig. 16 瓢手文・満文各種 .....	19
Fig. 17 金武古墳群横穴式石室編年略表 .....	21
Fig. 18 吉武L群古墳配図 .....	24

## 図版目次

卷首図版 (カラー) 吉武K 7号墳奥壁	
P L. 1 吉武K群遠景 (上) 西から (中) 南 から (下) 東から	
P L. 2 K 6号墳 (上) 墳丘 (中) 石室前壁 (下) 石室奥壁	
P L. 3 K 7号墳 (上) 石室入口部正面 (中) 同・側面 (下) 石室前壁と閉塞部	
P L. 4 K 8号墳 (上) 墳丘 (中) 石室前壁 (下) 玄室床面仕切石	
P L. 5 K 9号墳 (上) 墳丘 (中) 石室奥壁 (下) 石室前壁	
P L. 6 出土遺物	

## 表目次

	頁
Tab. 1 吉武K群古墳一覧 .....	4
Tab. 2 K群出土土器観察表 .....	17
Tab. 3 金武古墳群古墳計測表 .....	22 ~ 23
Tab. 4 時期別造営古墳一覧 .....	23



# I はじめに

## 1 調査にいたる経過

本書で報告する装飾古墳——吉武K7号墳は、1978年12月の初め、当時実施していた早良半野内の埋蔵文化財分布調査中に、壁面の存在が確認された。市教育委員会は、森貢次郎氏（九州産業大学教授）に鑑定をお願いした結果、玄室奥壁にみとめられた装飾文様は変形巻手文（満文）を主体とした類例のない文様構成をもつ装飾古墳との結論をえた。年度もおじ道っていたため、とりあえずの処置として石室開口部を封塞することとなった。写真撮影・石室の概略の記録を作成したのち、12月27日に県教育委員会の指導と協力をえて、壁面のアルコール消毒を行い粉末ホルマリンを石室内に収めて密封した。

ちょうどその前後に、吉武K7号墳の分布する丘陵を造成・開発するという計画の問い合わせ（靈園・病院建設）があった。市教育委員会は、装飾古墳の重要性と周辺景観保全の立場から、こうした計画断念の説得につとめるとともに、将来にわたって保護・保存を計るべく基礎資料の作成を急ぐことになった。

かくして吉武K群の調査は、重要遺跡確認調査として国庫の補助を受け、1979・80年の2年度にわたって実施した。79年度はK6～12号墳の地形測量を、80年度はK6～9号墳の墳丘測量と石室の実測を行った。装飾古墳K7号については、調査終了後に消毒を行い再び密封している。

## 2 調査の組織

調査主体	福岡市教育委員会	文化部文化課埋蔵文化財第2係
事務担当	古藤正生	
発掘担当	柳沢一男・横山比嘉	
発掘補助	吉原滝雄・小林義彦・波浪和子	

なお、壁面装飾の発見後調査にいたるまで文化庁阿部義平氏、県教育委員会文化課・九州歴史資料館の諸氏からは多くの指導・助言・協力をいただいた。壁面装飾の調査にあたって、九州産業大学教授森貢次郎氏は多大の教示をあたえられた。また地元吉武地区的区長・地主の諸氏には調査を快諾され、牛尾尾一氏は接渉の便をはかられた。厚くお礼を申しあげたい。

## 3 調査概要

本調査での実施項目はつぎのとおりである。

- 1 吉武K6～12号墳の地形測量図(1/500)作成(業者委託)
- 2 K6～9号墳の墳丘測量図(1/500)作成
- 3 K6～9号墳の内部主体(横穴式石室)の清掃と実測図(1/50)作成・写真撮影
- 4 K7号墳の壁面文様の調査・実測図(1/50)作成・写真撮影

このたび実施した調査は、装飾古墳吉武K7号墳の壁面を中心に、吉武K群の構成と性格を検討し、将来の保存計画のデーター作成が課題であった。そのため、できるだけ現状を保持するべく、測量に必要な樹木の伐採、石室内に堆積した土砂の撤出を行ったのみで、トレンチなどによる墳丘外壁等の調査は実施していない。したがって、各古墳墳丘の規模(外径)や區溝の有無、構築法、また葬道入口部の埋没している横穴式石室についてはその全容を知りえない面もある。このように限られた調査ではあるが、新たに幾つかの知見があった。一つは、発見時奥壁のと思われていたK7号墳の壁画は、奥壁に接する左右の腰にも描かれていたこと、その二は堆積土を除去したところ、奥壁の下部に人物の描写が検出されたことである。また吉武K群の構成が一定程度把握されたことによって、本群を含む金武古墳群(總数145基—現存113基)という大形群集墳を検討するうえで、さらに群集境内における装飾古墳の位相を考えるよい材料を提供したと思われる。

## II 古墳の位置と環境

本書に報告する吉武K群は、西区吉武字島越に所在し、145基からなる金武古墳群の一支群である。金武古墳群は早良平野の西南部に位置し、平野を貫流する嵐見川の西岸に発達した扇状地と、周辺山麓に分布する大形群集墳である。国土地理院作製の5万分の1の地形図(福岡)では、図幅上端より31.8cm、左端より10.5cmの位置にある。

早良平野は、東西5km、南北10kmほどの博多湾に開けた海岸平野である。平野の西側は長垂・叶嶽山塊を介して今宿・糸島平野(怡土)へ、東は平尾丘陵・油山山塊を経て福岡平野(郡)へと通じ、弥生時代中~後期の段階では、いわば二つの政治的結合圏(怡土・郡国)の中間緩衝地帯にあたる地域ともいわれている。

紙数の関係上、早良平野の後期群集墳に限って概観しておきたい。

縄文時代の早良郡は、早良平野と東に接する桶井川流域一带を含むが、その大半は早良平野が占める。これまで、郡内で確認された古墳数は約850基(方形周溝墓を除く)、うち約700基が平野内に分布する。また調査された古墳数は、20古墳群181基、平野内では17古墳群120基に達する。その大半は後期に属する群集墳であって、前期古墳は数例にすぎない。それとともに、これまでの分布調査によつても、前方後円墳や首長墓と考えられる大形墳の存在がみとめられない。前期後半には30mほどの円墳が3基造営されているが、これも平野全体を統括するほどの内容とは断定しえない。6世紀以降の群集墳のなかには、金武古墳群・羽根戸古墳群などで、世代の連続する大形墳がみとめられ、小地域の首長墓が想定される。こうした特徴的ともいえる事実は、前期においては前段階(弥生時代後半期)に象徴されるように怡土・郡国との間にあって自立性が弱く、首長層の析出が遅れたことに、また後期では、鉢井の乱以降中央勢力の進出拠点となつたことにお因するのではないかと推測されてい

<sup>(21)</sup>る。

さて平野内における群集墳の分布は、町耕地たる沖積地にはみとめられないが、周辺山麓の丘陵部を除りつぶすほどに広がっている。平野西部では、南端の西山東麓から海岸部の長垂東麓に至る約9kmのあいだに425基、東部の油山西北麓に248基、油山から北にのびる飯倉丘陵には20基、沖積地内の丘陵部に8基を数える。とくに集中した分は、西部の姫盛山山麓で、北麓に144基の刻根石塚群、南麓に145基の金武古墳群の二つの大形群集墳がある。東南部の西油山山麓も合せて150基以上となる。古墳群の詳明は各報告書に譲る。

平野内の群集墳の形成は、6世紀の初め頃にその萌芽がみとめられるが数は少ない。中葉~後半には、ほとんどの古墳群で造営が開始されている。一部には7世紀代になってからのものもある。6世紀前半~中葉の古墳は竪穴系横口式石室もしくはその系譜をひく石室を埋葬施設としている。高崎古墳群2基、金武古墳群4基、山崎古墳群1基、千原古墳群1基がこれまでの調査例である。金武古墳群吉武I群では、その後の継続した造営によって一支部を形成するが、他の例では継続関係はみとめられないようである。また終末段階の古墳は、それらが集中して一支部を形成するばあと、前代からの継続的な支群内に一基づつ造営されるものがある。いずれも小形の横穴式石室を採用する。これらは7世紀後半~末に集中し、8世紀まで下る例は知られていない。

700基におよぶ平野内の群集墳形成の背景の一つとして、6世紀代よりこの地で展開した鉄生産は注意されてよいだろう。平野内では、これまで100ヶ所をこえる鉄滓出土地が確認されている。しかし調査された製鉄遺跡は少なく、炉体構造が知られる例はない。また遺構の性格上、年代を決定することも困難であるが、6世紀後半以降の群集墳への鉄滓供獻例から推して、鉄生産の開始期が6世紀まで遡ることに誤りはない。こうした古墳に対する鉄滓供獻は、福岡・早良・今宿平野を中心とする一部宗像郡におよび、これまで62例を数える。そのうちの45例が早良平野にある。これをもって、ただちに古墳被葬者の職掌とするものではないが、そうした関連性は無視しがたい。早良~今宿にかけての高品位な砂鉄を背景に、朝鮮半島からの渡来技術集団を媒介にした製鉄が、超然的に行われたことは推測にかたくない。

註1 下記文献では147基としたが、計算ミスによるもので145基と訂正する。脚注一男・山崎龍秀「轟道大野・大友鏡関係遺跡文化財調査報告書」(福岡市埋蔵文化財調査報告書第1号)1980。

註2 真兵次郎ほか「有田鉄鉱」(福岡市埋蔵文化財調査報告書第2号)1968。

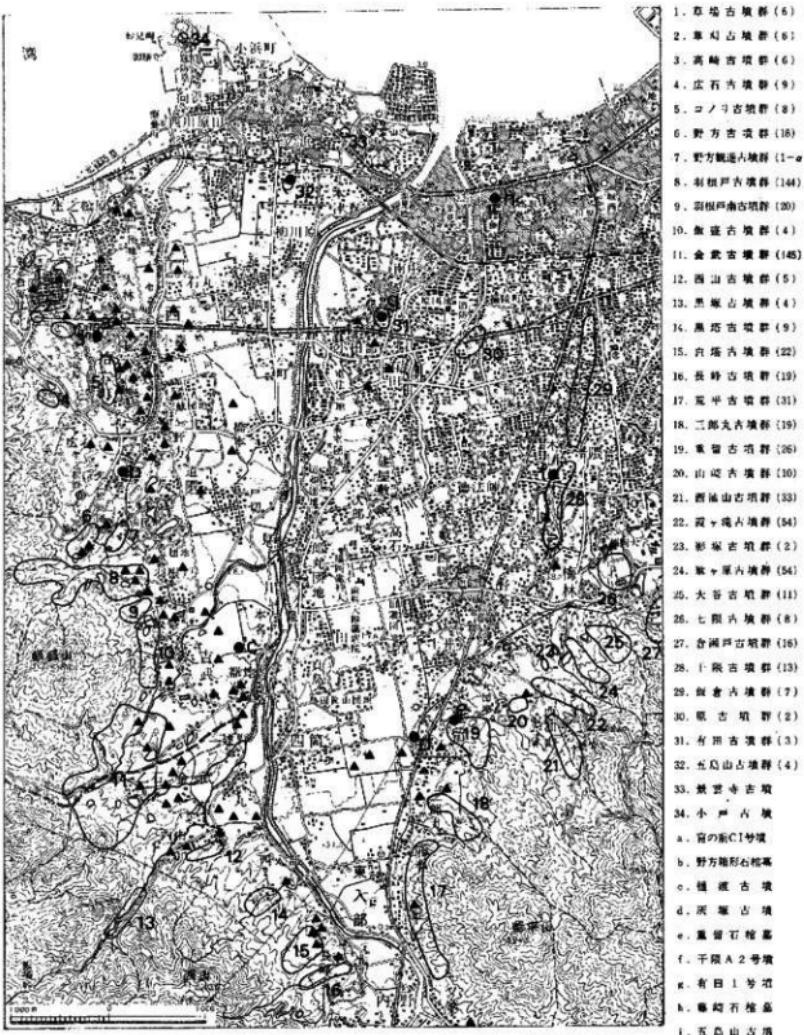


Fig. 1 早良平野の古墳群・鉄滓出土分布図 ●は前・中期古墳 ○は後期の墓地群 ◎は石器類・古墳群 ▲は鉄滓出土地

### III 吉武K群の調査内容

#### 1 K群の概要

吉武K群は、余武古墳群中もっとも東端に位置し、ほぼ南北にのびる丘陵上の12基の円墳からなる。この丘陵は、南北長約600m、東西幅約100m、最高標高76.7m、周囲の水田との比高差約25mあまりの狭長な独立低丘陵である。古墳番号は南からK1・2……12号墳としたが、K3～5号墳の3基は昭和30年代の初め頃に、宅地造成のため未調査のまま破壊された。したがって現存する古墳は9基でそのうちのK6～9号墳が今回の調査対象となつた。

**3～5号墳** Fig. 2 の K3～5号墳の位置は、地元在住の牛尾幸一氏の教示による。残念ながら詳しいメモ類が残されていないため、各古墳の詳細は不明である。氏によれば、墳丘・石室は、通有のものよりや大きいく、K7・8号墳ほどの規模で、石室はいずれも南に開口していた。またK3号墳の墳丘北側には、前方部状の張りだしがあつたらしいが、今となっては跡めることはできない。

**立地** K1・2号墳、K3～5号墳が近接した位置にあるが、K6～12号墳は一定の間隔を置いている。K1・2号墳が丘陵尾根線より下った西斜面のはか、他はすべて尾根線平坦面上に築造されている。K6号墳が尾根頂部上にあってもっとも高く、南・北に行くにしたがって低くなっている。

**墳丘** 墓周囲の変形が著しく断定しえないものもあるが、すべて円墳と思われる。K8号墳の径17mがもっと大きい。K9・12号墳のはあいは、径5～6mと小さいが、もちろん造営当初の姿でなく開墾時の削除の結果であろう。K1・2号墳のように斜面に築造されたばあい、当然高い側の斜面を馬蹄形にカットする地山整形を行っている。尾根平坦面上のK7・8・9号墳などでは周溝がめぐる可能性が強い。

**埋葬施設** 埋没しているK11・12号墳は明らかでないが、他はすべて横穴式石室である。石室の開口方向は、K1・2号墳が西、K7号墳が東のほかは、おおむね南に開口している。石室の規模では、観察可能の6基の石室のうち、K2・6・9号墳が通有のもので、他の3基は一回り大形である。この6基の石室のうち、K10号墳は材料不足のため何ともいえないが、他の5基の築造企画は晋尺系尺度を採用している。6世紀中葉～後半期の石室のはあい、築造企画使用尺度は晋尺系尺度のもので、通有の玄室規模としては、幅は8尺がもっと多く、長さは10尺、 $8\sqrt{2}$ 尺＝11尺、12尺、14尺の採用が一般的である。K2・6・9号墳がこれに該当する。K7・8号墳は玄室幅に9尺を採用する異例であって、玄室幅に1尺の拡大をみると、古墳被葬者集団の社会的位置を表象するように思われる。

Tab. 1 吉武K群古墳一覧

古墳番号	墳丘形	墳丘高	石室方位 (開口方向)	玄室			羨道			備考
				幅	長	高	羨	反	高	
1号墳	12.5	2.8								石室破壊
2号墳	10.5	2.9	S60°W	2.0	3.0	2.4	0.8			羨道埋没
6号墳	15.0	3.0	S12°W	1.95	2.25	2.5	0.9		1.25	
7号墳	12.0	3.4	S39°30' E	2.26	2.78	2.8	1.0		1.50	装飾古墳
8号墳	17.0	3.5	S23°W	2.25	3.03	3.05			1.45	
9号墳	6.0	1.0	S20°30' W	2.4	2.68	2.45	0.9		1.55	複室構造
10号墳	16.0	3.5	S20°W	2.35	4.0	2.6	0.9			羨道埋没
11号墳	13.0	2.8								石室埋没
12号墳	5.0	1.0								ほぼ墳滅

3～5号墳はすでに消滅しているため除外した。



Fig. 2 金式古墳群分布図(白メキは消滅古墳)

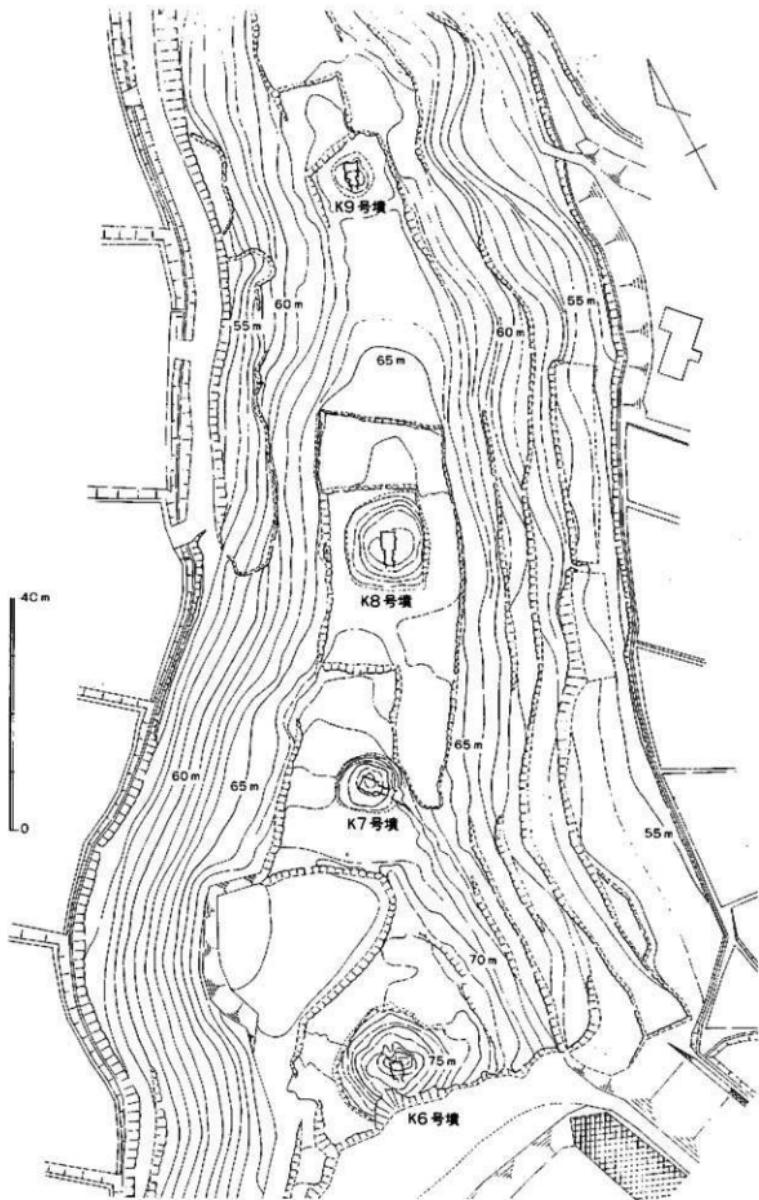


Fig. 3 古武K6~9号墳地形測量図

## 2 K 6 号墳

### 1) 墳丘 (Fig. 4, P.L.)

丘陵尾根上の凸部を利用して築造された円墳である。墳丘南側は、大規模な土取りによって削除され急崖となっている。また西・北側も、墳丘裾部よりもやや下った周囲が削られ、1~1.5mほどの段落ちとなっている。墳丘上部の保存はよいが、横木採取による小穴がいくつかみられる。また頂部より、わずかに南へ下ったところが削除され、天井石の一部が抜かれて石室が開口している。

地形上、墳丘裾部は地山削り出しによる整形が想定される。そのためか、裾部の境は明瞭でないが、傾斜のわずかに変わる73.5mの等高線付近が構造と推測される。したがって径約15m、高さ3mあまりの規模と考えられる。

### 2) 埋葬施設 (Fig. 6 - P.L. 2)

主軸をN-12°-Eにとり、南々西に開口する單室の袖轴型横穴式石室である。石室の現状は、墳丘南側の土取りによって築造前半部の側壁が破壊され消滅している。また、前壁上部の壁石と天井石の一部が失われている。

玄室は矩形の平面形をとり、幅1.9m、長さ2.4mを測る。側壁の下部にはやや大きめの転石を配して腰石とし、上部腰石は上にいくにしたがって小ぶりの石材を使用して穹窿形に持ち送っている。天井高は2.5m、3石(1石欠)の転石を架構する。床面は敷石が取り除かれて原状をとどめていない。左・右袖部は、横長の偏平な石材を用いて4段に積み上げている。玄室側壁の石材はすべて花崗岩である。その大半は転石で、割石あるいは面を加工したものは少なく、そのため石室内面に凹凸が顕著にみられる。

羨道部は右側壁の崩落する危険性があつたため完掘していない。土取りによる前半部の破壊は、ちょうど閉塞部の前面までで、天井石は2石が残存している。閉塞部は羨道の奥により、小形の転石を粗雑に積みあげて構成しているが、遺存状態はよくない。ここに石材のなかに、水成岩系のものが混っている。

石室の築造企画は、1尺=24cmの音尺系尺度でおこなわれている。玄室の幅8尺、長さ・高さ各10尺、羨道部の幅4尺、高さ5尺の原企画が推測される。

### 3) 出土遺物 (Fig. 5 - P.L. 6)

玄室・羨道後半部の床面は、荒れて原位置をとどめた敷石ではなく、したがって出土した遺物もすべて原位置から移動している。出土遺物は少なく、鱗片が多い。列記すれば次のとおりである(数字は破片よりみた個体数)。

須恵器(杯蓋2、塵2、甕1)

馬具(鍍金具1、留金具1)

武器・工具(寶刀1、鐵鎌1、刀子1)

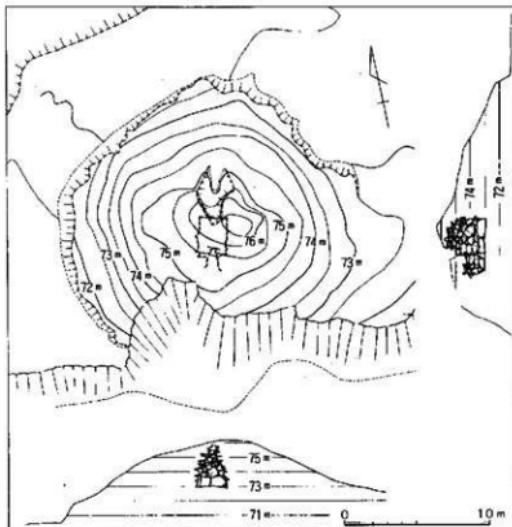


Fig. 4 吉武K 6号墳墳丘測量図 (P.L.)

その他（黒曜石フレイク1）

須恵器（1・2）杯蓋1は口径11.5cm、2は口径10.6cmを測る。天井部の調整は、1が回転ヘラ削り、2はヘラ切り後のナデ調整。ともに天井部にヘラ記号がある。1はⅣA期、2はⅣB期に属する。他の駆・甕は小片のため図示しえない。駆の一点はⅢB期の可能性がある。

馬具（5・6）5は鐔金具の下端部。木芯をとめる鉤が打たれている。6は座金を有する筒頭の留金具。座金は破損し形状は判らないが、花弁であろう。座金のあいだには直交する木目の木質物が付着している。

武器（3）広根式の鐵鎌。刃部先端、茎下部を欠く。茎に矢柄木質が残る。

工具（4）刀子。茎、刃部先端を欠く。平様である。

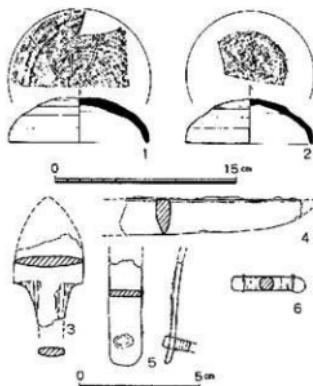


Fig. 5 青武K.6号墳出土遺物  
(1・2は1%, 3~6は3%)

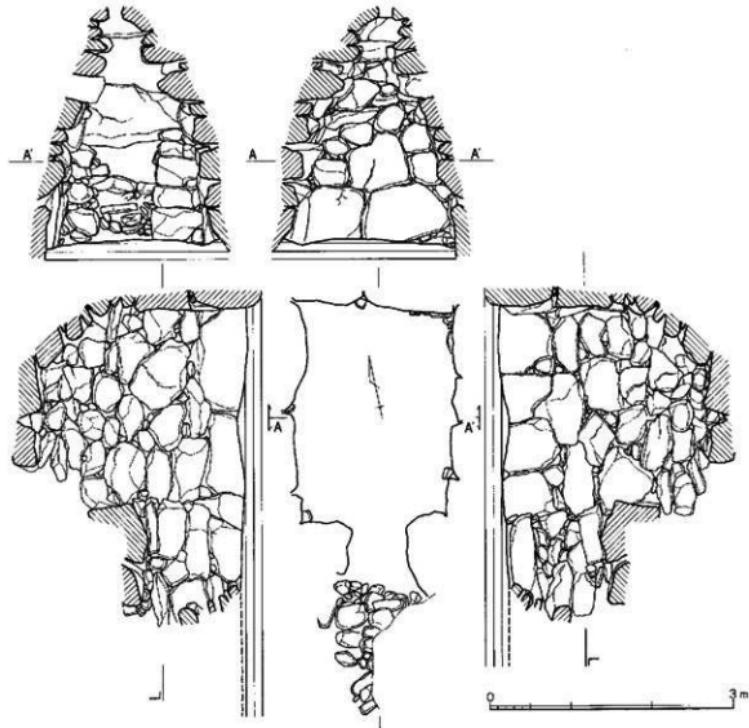


Fig. 6 古武K.6号墳石室実測図(16) L=G.H. 74.00m

## 3 K 7 号 墓

## 1) 墓丘 (Fig. 7, P.L. 3)

丘陵尾根上に築造された円墳である。周囲は畑地開墾のため平坦となり、畑地境が0.5~1mの段落ちとなっている。墳丘の南東側(石室入口部)は1mの段落ちがあり、墳丘の一部が削除されている。また墳丘裾部も、周囲から削られ変形しているが、上部の保存状況はよい。現状での規模は、径12m、高3.4mあまりを測る。しかし、石室入口部の埋没状況からみて、開墾時に相当墳丘周囲が埋められているようで、この点は石室の規模でも想定される。当初の墳丘径は、15~16mと推定され、墳裾周囲には邊溝がめぐっているものと思われる。

## 2) 埋葬施設 (Fig. 8, P.L. 3)

主軸をN39°30' Eにとり、南東に開口する單室の向抽型横穴式石室である。石室の平面形は、矩形プランの玄室に狹長な羨道を接続する通廊のタイプだが、羨道端部前面に「ハ」の字状に開く石組みがみられる。石室の現状は、羨道前半部右壁がすでに失なわれ、玄室正面の敷石も荒れて原位置をとどめるものは少ないが、他の部分の保存状況は良好である。なお石室に使用された石材はすべて花崗岩である。

玄室は周壁壁線に多少の凹凸があるが、概ね幅2.2m、長さ・高さとも2.85mを測る。周壁下部には、奥壁1石、左・右壁各2石の腰石を配している。奥壁の腰石は、幅2.2m以上、高さ2mの未加工の転石である。上部壁体は、0.5~1m前後の転石・割石(少)を使用し、上方にいくにしたがって強い持ち込みをもたせている。いわゆる力石の手法は上部にみとめられる。前壁は冠石上二段積みで、他の壁面に比べて持ち込みが強いた。

羨道部は、閉塞部を境に前・後半部に分られる。前半部では、右壁とそれに連接する貼石状の石組みがすでに削除されているが、左壁でみると、閉塞部前面にある立石までが羨道部全体と観察され、それに続く石組みは攝方基底より浮いた貼石的な手法と考えられる。そのばあい、羨道長は約4m、貼石を含めると5.5mとなる。閉塞部より玄室側の羨道後半部底面には、二ヵ所に襖石が配され、入口部に向って一段高くなっているが、この部分の敷石は当初より行われていない。羨道の天井部は4石の転石で構成されているが、奥から入口部に向って陰除に高く構築され、その差は約40cmほどである。しかし、底面も一段高い造作が行われており、高さの1.5mに変化はない。閉塞部は前面の襖石より50cmほど離れて小形の転石を使用して積みあげた構成である。

詳細な分析は略すが、これまで、行ってきた方張との適合関係による石室企画尺度の検討によって、本石室の企画は1尺を24cmの骨尺系尺度で行われたと推測される。石室全長(貼石部を除く)28尺、玄室長12尺、羨道長

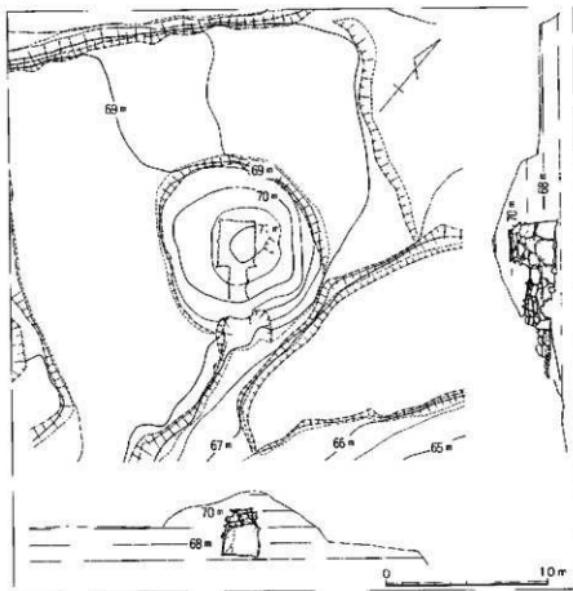


Fig. 7 古武K 7号墳墳丘測量図 (1/200)

16尺、玄室幅9尺、同高11尺、横道奥幅4尺、同高6尺の原企画が想定される。

**壁面装飾** 壁面は、玄室の奥壁腰石およびそれに接する左右腰石の計3カ所に描かれている。今回の調査でみとめられた顔料は赤色の一様のみで、肉眼の観察からはベンガラと推測される。壁面の詳細は後節に譲り、装飾部位について述べる。

前述したように装飾は奥壁を含めて三ヵ所である。まず奥壁では、幅2.2m、見かけの高さ約2mほどの巨大な腰石のほぼ全面に描かれる。壁面の殆どに同心円文・溝文を配し、下部の無文帯のほぼ中央に唯一の具象文様である右手を上げた人物像を置いている。破壊された玄室床面は、復原するとちょうど人物像の下端部より少しどったところと推測される。

側壁部の装飾は、その前方に接する腰石にも描くスペースが充分にあるものの、奥壁側腰石以外にはみとめられない。左壁の壁面は、幅・高さ（見かけ）とも1.2mの腰石のほぼ全面と、上部に接する小さな腰石2石に及ぶ。この壁面の装飾文様は、腰石中央部が流下物の付着によって判別が困難な状態である。確認した文様は上部に溝文を配し、その上・右・下辺に縁取り状に曲線を描いている。右壁では、幅1.5m、見かけの高さ1.7mの腰石の中央上位に、横長の同心円文を一つだけ描く。この面では他にみとめることができず、左壁の複雑な文様構成に対しきわめて簡素といえる。

#### 4) 出土遺物 (Fig. 9, P.L. 6, Tab. 2)

玄室～横道後半部の擾乱土、および閉塞部前面の墓道埋土から出土した。石室内出土遺物で原位置をとどめるものはない。中世の遺物は石室内と墓道の出土である。これらの出土遺物は次のとおりである。

須恵器（杯蓋12、杯身14、短頸壺1、長頸壺2、平瓶2、高杯6、縁1、器台2、腹5）

土師器（杯蓋1、杯身1、高杯1……副葬遺物、皿5、杯9……中世）

瓦器（椀1）、青磁（碗1）、白磁（皿1）、施釉陶器（水注1）

武器・馬具（直刀1、柄頭紐穴金具1、鉄鎌6、鎧金具3、鉗具1、不明2）

その他（鉄滓5、墨環石フレイク3、サヌカイトフレイク3）

須恵器（1～11）　杯蓋 I類（1・2）は、口径13.5～14.6cm、器高4.0～4.2cm、天井部のヘラ削り範囲は全体の%程度で、外面にヘラ記号がある（III B期）。II類（3・4）は口径12.0～12.2cm、天井部のヘラ削りの範囲も弱く狭い。3の天井部外面にヘラ記号がある（IV A期）。III類（5）は扁平な天井部から嘴状に折りたたむ口縁部に統く。杯（7）と同時期であろう。杯身（6）は口径10.5cm、底部のヘラ削り範囲も狭く粗雑である（IV A期）。7は深い椀状の体部に、外方に踏んばつた形状の高台を付したもの（7世紀末）。耳（8）は体部を欠く。頸部は細くラバ状に開く。蓋付長颈壺（蓋9）は口径6.6cm、肩半なつまみをつけたもの。長頸壺（10）は体部を欠いた脚台部のみである。脚筒の4カ所に長方形の透しがある。器台（11）は口縁部の破片まであるが接合しない。脚邊部に歪みがあるため、径は不確定である。脚部外面には丸いカキ目が施される。透しは4カ所に4段の長方形である（III B期）。

土師器（12～14）　外底はすべて糸切りである。皿（12）は口径9.0cm、杯（13・14）は口径12.6～12.8cm。

瓦器（15）　口径16.4cm、器高5.5cmを測る椀である。体部内・外面は粗いヘラミガキを施す（12c）。

施釉陶器（16）　褐釉の水注。把手を欠く。口径11.1cm、器高22.4cm。胎土は砂粒を含み暗灰色。薄い施釉で体部下半は露胎である。体部の下位に白砂の付着した12カ所の目跡がめぐる（12c）。

白・青磁　青磁は龍泉窯系の碗の破片が1点ある。白磁（17）は、いわゆる口禿の皿である（IV類）。

武器（30～32）　30の鐵鎌は片丸造の刃部をもつ。直刀（32）は茎の破片。31は鋼頭張りの柄頭紐穴金具。

馬具（34・35）　鎧金具（34）は幅1.5cmの鐵板をU字形に折りたたんだもの。鉗具（35）の全形は不明。

鉄滓（P.L. 6）　墓道底面より4点、閉塞部の石組み中より1点の計5点が出土した。最大のもの4点と小さなものの1点、表面は粗鈍で一部ガラス質の部分もある。いずれも鍛錬滓である。

註1 九州歴史資料館森田哲・横田賀次郎氏の教示による。

註2 横田賀次郎・森田哲「人宰府出土の中絶入海瓶について」『九州歴史資料館研究報告』1978

註3 鉄鎌の分析をお蔵した大澤正巳氏による。

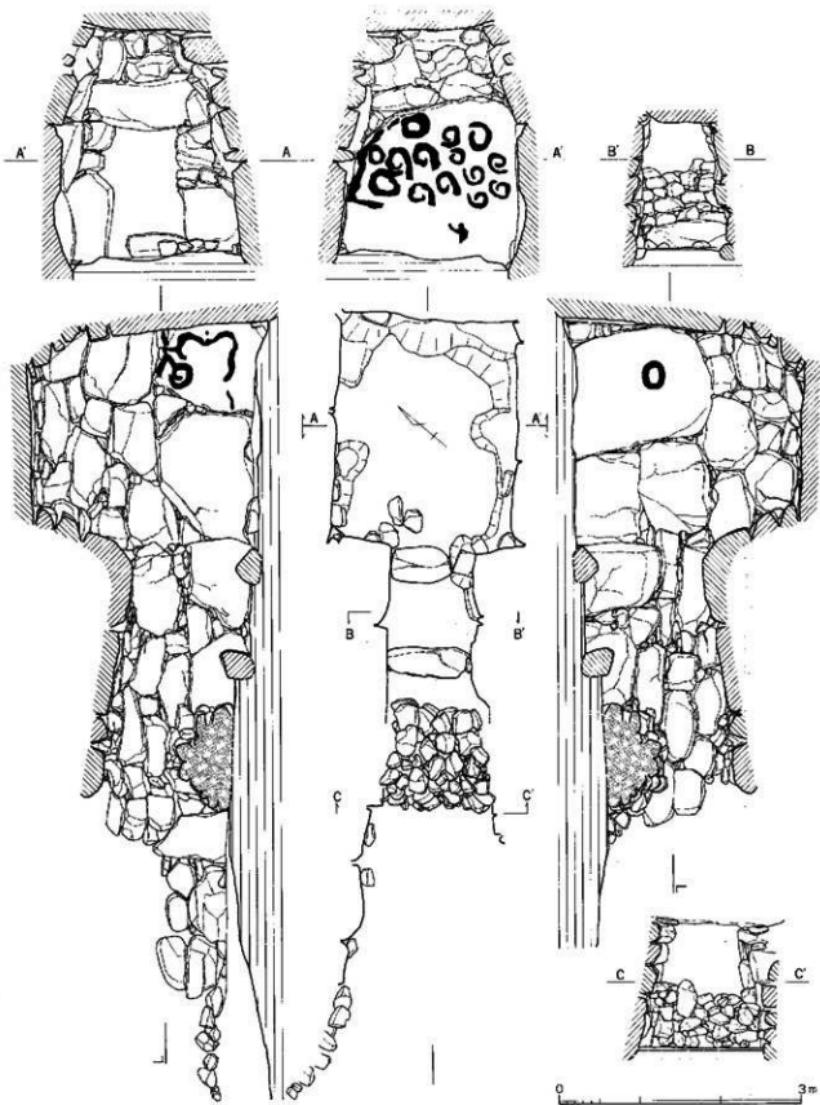


Fig. 8 吉武K7号 sondage stratigraphic section (%) 1.=GII.68.50m

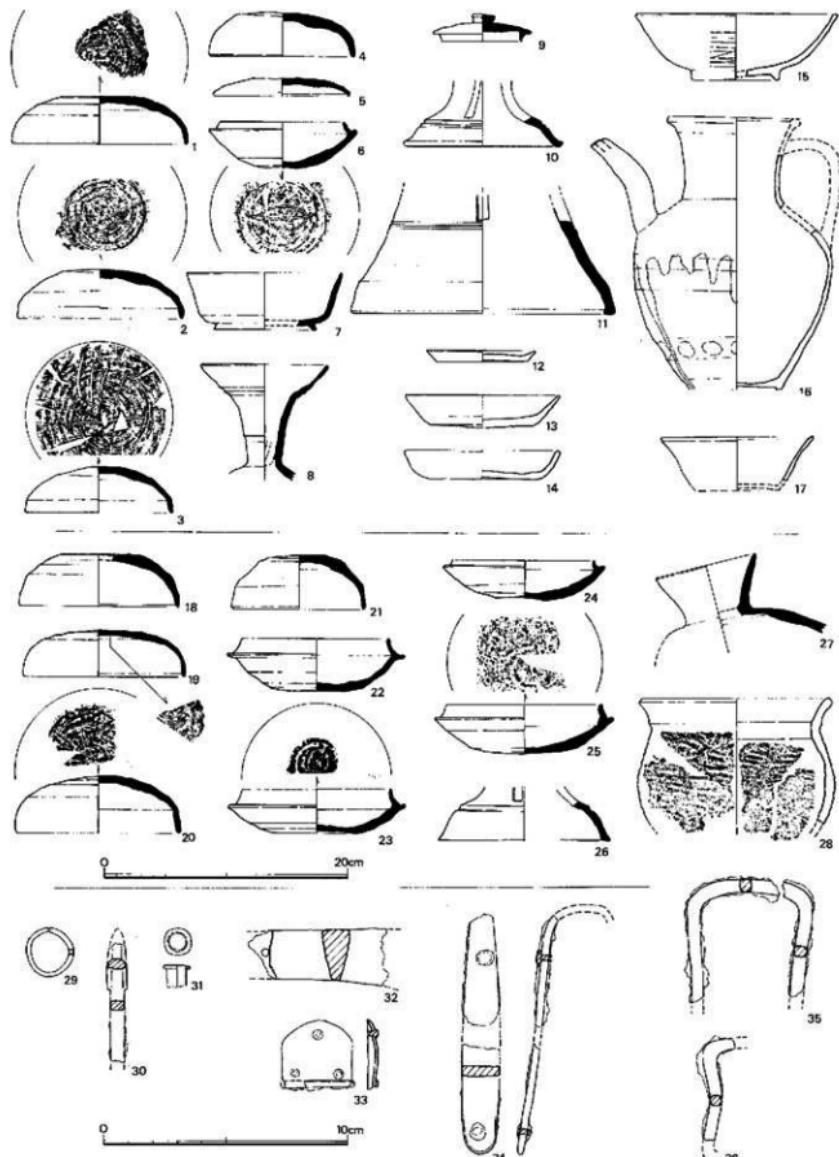


Fig. 9 青銅器7・8号墳出土物実測図。(1-28はK7、29-36はK8)  
(1-17, 30-32, 34, 35-K7号墳、18-28, 29, 33, 36-K8号墳)

#### 4 K 8号墳

##### 1) 墳丘 (Fig. 10, PL. 4)

7号墳の北30mに位置し、丘陵尾根上に築造された円墳である。墳丘周囲は、畠地として使用されていたため平坦に整地され、周溝痕跡はみられない。墳丘の保存は比較的よいが、頂部が流出して天井石の一部が露出し、奥壁の最上部が開口している。また東側の裾部も土取りを受け変形している。

現状での規模は、南北17m、東西15m、高さ 3.5m を測るが、墳塁が埋められてしまい、径19~20mほどの墳丘規模が想定される。

##### 2) 墓葬施設 (Fig. 11, PL. 4)

主軸をN23°Eにとり、南西に開口する単室の両袖型石室である。葬道前半部は閉塞石を境に土砂が充満しているため調査を行っていない。なお石室壁体使用石材はすべて花崗岩である。

玄室平面形は、壁線に多少の凹凸があるものの整った拙形を呈し、幅2.2m、長さ3.0mを測る。周壁の下部には大形の転石（一部分加工）を掘えて腰石とする。奥・右壁は各2石、左壁は3石で構成され、とくに奥壁では高さ2mをこす巨石をほぼ垂直に立てている。腰石上は、横長の擧石や一部加工転石を主に使用して強い持ち込みを行なながら上部に積み上げ、床面より3.1mで2石の天井石を横架している。玄室床面は、原位置をとどめる敷石ではなく荒れていたが、ほぼその中央に緑泥片岩の板石3石が倒れた状態で検出された。その形状からみて、屍床を画する仕切石として、玄室中央部に配されていたと思われる。

葬道部は、幅1.2m、第1転石の前まで2.7mを測り、その前方は小ぶりの転石を積みあげた閉塞部となっており全長は不明である。玄室と同様に周壁下部には腰石を配し、上部壁体には横長の石材を使用している。

石室築造企画は1尺=25cmの晋尺系尺度を使用し、玄室幅9尺、長さ・高さ各12尺、葬道幅5尺、高さ6尺の原企画が想定される。

##### 3) 出土遺物 (Fig. 9, PL. 6, Tab. 2)

玄室～葬道後半部床面は著しく破壊され、原位置をとどめた遺物はない。出土遺物は次のとおりである。

須恵器（杯蓋15、杯身8、広口壺1、長颈壺2、平瓶1、甕5）

土師器（甕1）

義身具（耳環1）

馬具・武器（足金具3、鞍具1、鐵鎌3）

須恵器（18~27） 細片が多く図示できるものは少ないが、杯でみるとかぎり、追葬を含んだ全時期をしめして

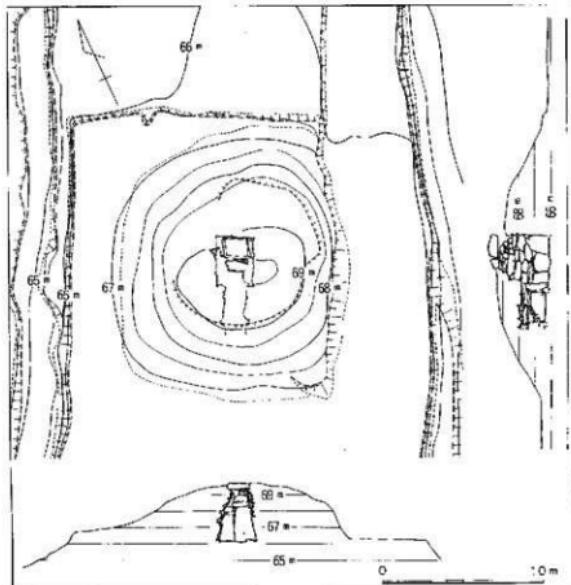


Fig. 10 古武K 8号墳墳丘測量図 (Fig. 10)

いる。杯蓋 I 類 (18-20) は口径13.2-14.3cmを測る。天井部のヘラ削りの範囲は全体の1/2程度で、20にはヘラ記号が、19の内面には同心円印がある。18・19の口縁部内面の模様は痕跡程度である (III B 期)。II 類 (21) は口径10.9cmの小形のもの。天井部は小さく平坦となり、ヘラ切り後ナデ調整を施す (IV B 期)。杯身 I 類 (22・23・25) は口径12.2-12.4cm、立ちあがり高1.2-1.4cmを測る。底部のヘラ削りの範囲は少程度で、23の内面には同心円印があり、25の内面にはヘラ記号がある (III B 期)。II 類 (24) は口径11.6cm、立ちあがり高0.5cmを測る。底部のヘラ削りの範囲は広程度である (IV A 期)。26は長頸壺の脚で、径14.0cmを測る。脚部の四方に長方形透しが入る。平瓶 (27) は体部を欠く。口径8.4cm。

土師器 (28) 壺 復原口径16.4cm。短い口縁はわずかに肥厚してゆるく外反する。体部外面には右下りの粗い平行線印が施され、内面に当て其痕が残る。胎土は砂粒を多量に含み粗い。北九州沿岸の特徴的な製塗上器が  
表身具 (29) 細身の耳壺である。中実の銅胎に余荒を張ったもの。径1.5cm。

馬具 (33・36) 33は宝珠か辻金具の足金具。鉄地金銅張で3本の綱でとめる。36の鞍具の全形は不明。

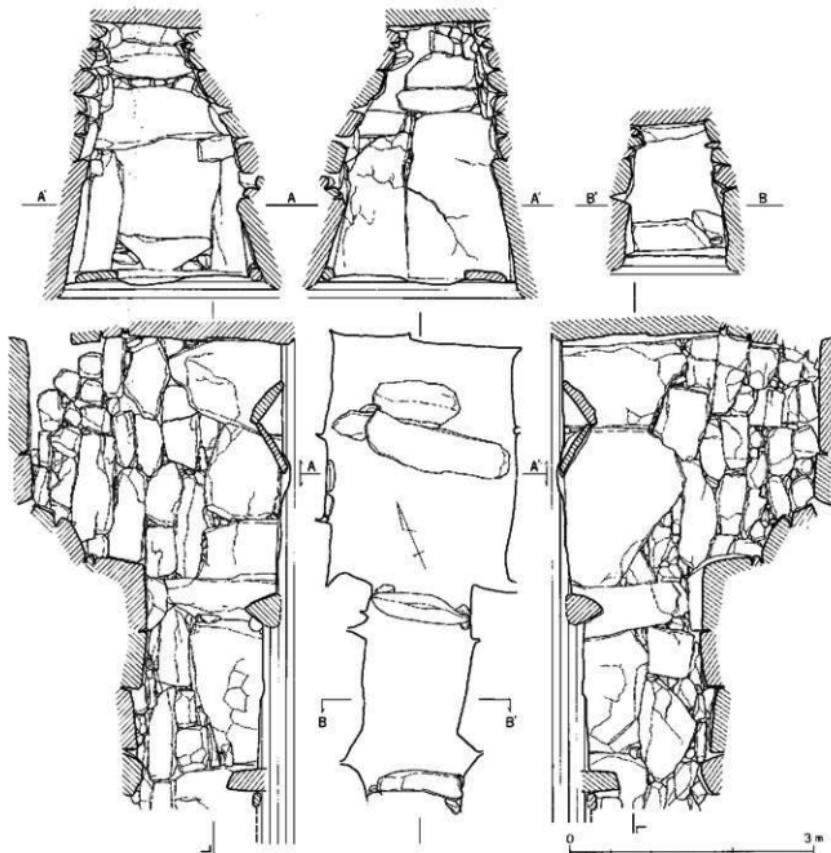


Fig. 11 吉武K 8号墳石室実測図 (26) L = G H. 67.00m

## 5 K 9 号墳

### 1) 墳丘 (Fig. 12, PL. 5)

丘陵尾根上に築造された円墳である。8号墳の北約40mの位置にあって、尾根平坦面のもっと狭いところに當まれている。墳丘は、頂部が削除され天井石が露出し、周囲もまた細地盤堅による切り盛りで著しく変形している。現状の墳丘輪縁では径6m、高さ1mほどの小円墳状をなすほどである。墳丘北側一段下の畠地面が、ほぼ開墾前の旧状をしめすと思われる。したがって、現墳丘裾の周囲は、1.2~1.5mあまり埋土されていることになり、また石室の規模からも12~14m位の墳丘規模が推測されてよいであろう。

### 2) 埋葬施設 (Fig. 14, PL. 5)

主軸をN20°30' Eにとり南西に開口する複室構造の両袖型横穴式石室である。羨道入口部は埋没していたが、玄室天井部の大半が除去されており、石室内は原位置をとどめる床面敷石がないほど荒れていた。羨道の閉塞石前面は未調査のため、石室の全容は明らかでない。なお石室壁面に使用された石材はすべて花崗岩である。

後室（玄室）の平面形は梯形を呈し、奥幅2.45m、前幅1.95m、長さ2.5~2.7m、高さは2.45mを測る。周壁下部には、奥壁1石、右壁2石、左壁3石の面の整った大ぶりの転石を配して腰石とし、その上部は横長の割石・転石を主に用いて積みあげている。則壁上部の持ち造りは少ない。前壁は冠石上一段横積み、袖部（前・後室の間壁）は腰石上に一段横積みである。

前室の構造は、平面圆形のみ採用され、立面形すなわち天井部では羨道部の大井と同高で連続している。幅1.5m、長さ0.8m、高さ1.5m、後室壁より前室前壁までの長さは約4mを測る。壁体構成は後室と同様である。羨道部は、前室袖石間の柱石から1mほど前方に板石3石を使用した閉塞部まで、その先は未調査のため詳細は不明。

石室の築造会計は、1尺を24.5cmの晋尺系尺度で行なわれ、前・後室の合せた長さ18尺、後室は長さ10尺、奥幅10尺、前幅8尺、高さ10尺、前室では幅・高さとも6尺、長さ3尺の原企画が想定される。

### 3) 出土遺物 (Fig. 13, PL. 5, Tab. 2)

玄室・前室とも床面は著しく破壊されており、出土遺物は少なく、原位置をとどめたものもない。列記すれば次のとおりである。

須恵器（蓋2、杯身3、短頸壺1、提瓶2）

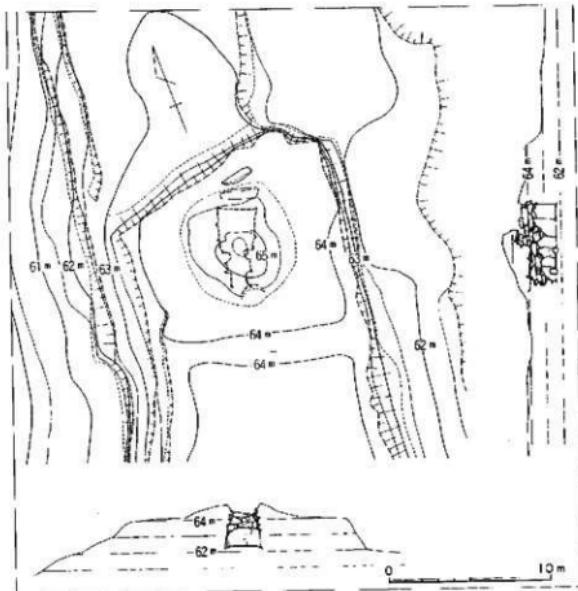


Fig. 12 古武K 9号墳墳丘測量図(3倍)

装身具（ガラス製丸玉2）

馬具（銅板2、鍍金具1）

武器（鉄鎌1）

須恵器（1） 杯身 口径10.9cm、器高3.3cm、支部径12.8cm、立ちあがり高0.8cmを測る。底部は狭い範囲に回転ヘラ削り調整、ヘラ記号がある（ⅣA期）。他の須恵器はいずれも細片のため図示しない。杯蓋のなかにⅢB期のものが1点ある。

装身具（2） ガラス製丸玉。径12mm、高9mm。藍色だが、器表の高触がすみ灰色を帯びる。

馬具（3） 素環の銅板。梢円形をなし、引手・衡を着装している。

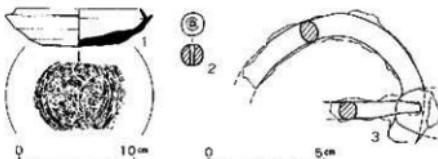


Fig. 13 青武K 6号墳出土遺物実測図  
(1は14、2・3は16)

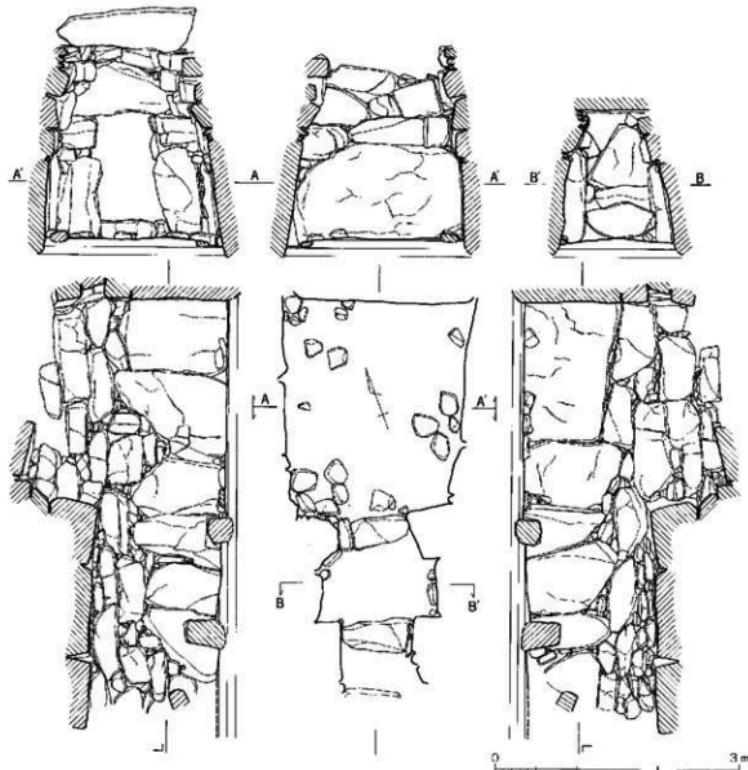


Fig. 14 青武K 9号墳石室実測図 (36) L = GH 63.00m

Tab. 2 K群出土土器計測表

(単位:mm)

番号	種類	口径	脚高	形態の特徴		手法の特徴	備考
				全体に丸みをもつ。口縁部の底は不明顯。口縁部は丸い。	全体に丸みをもつ。口縁部は丸くのびる。底部は尖りぎみにおわる。		
K 6	杯 盆	11.5	3.7	全体に丸みをもつ。口縁部の底は不明顯。口縁部は丸い。	全体に丸みをもつ。口縁部は丸くのびる。底部は尖りぎみにおわる。	天井部のへラ切り縫は全体の約程度。天井部内面にナナ調整。	天井部にはへラ記号玄室出土
	杯 盆	10.6	3.7	全体に丸みをもつ。口縁部との境は浅い凹線がある。口縁部は丸くおわる。	全体に丸みをもつ。口縁部との境は浅い凹線がある。口縁部は丸くおわる。	天井部のへラ切り縫は全体の約程度。口縁部は時計回り。天井部内面にナナ調整。	天井部にはへラ記号玄室出土
	杯 盆	14.6	4.0	全体に丸みをもつ。口縁部との境は浅い凹線がある。口縁部は丸くおわる。	全体に丸みをもつ。口縁部との境は浅い凹線がある。口縁部は丸くおわる。	天井部のへラ切り縫は全体の約程度。口縁部は時計回り。天井部内面にナナ調整。	天井部にはへラ記号玄室出土
	杯 盆	13.5	4.2	全体に丸みをもつ。口縁部との境は浅い凹線がある。口縁部は丸くおわる。	全体に丸みをもつ。口縁部との境は浅い凹線がある。口縁部は丸くおわる。	天井部のへラ切り縫は全体の約程度。口縁部は時計回り。天井部内面にナナ調整。	天井部にはへラ記号玄室出土
	杯 盆	12.2	3.8	全体に丸みをもつ。口縁部との境は浅い凹線がある。口縁部は丸くおわる。	全体に丸みをもつ。口縁部との境は浅い凹線がある。口縁部は丸くおわる。	天井部のへラ切り縫は全体の約程度。口縁部は時計回り。天井部内面にナナ調整。	天井部にはへラ記号玄室出土
	杯 盆	12.0	3.7	全体に丸みをもつ。口縁部との境は浅い凹線がある。口縁部は丸い。	全体に丸みをもつ。口縁部との境は浅い凹線がある。口縁部は丸い。	天井部のへラ切り縫は全体の約程度。口縁部は時計回り。天井部内面にナナ調整。	天井部にはへラ記号玄室出土
K 7	杯 盆	11.7	1.5	全体に丸みをもつ。口縁部は内面に小さく折り込まれる。	全体に丸みをもつ。口縁部は内面に小さく折り込まれる。	天井部はへラ切り縫は全体の約程度。口縁部は時計回り。天井部内面にナナ調整。	天井部にはへラ記号玄室出土
	杯 身	10.5	3.8	立らかがり高 0.8cm。内側する。底部は丸く外方にのびて受部につく。	立らかがり高 0.8cm。内側する。底部は丸く外方にのびて受部につく。	底部のへラ切り縫は全体の約程度。ロクロ回転は時計回り。内底にナナ調整。	底部にはへラ記号玄室出土
	体部	13.0	4.8	体部は深く、外反ぎみにのび、口縁は丸くおわる。高台は外方に難ねばる。	体部は深く、外反ぎみにのび、口縁は丸くおわる。高台は外方に難ねばる。	底部のへラ切り縫は全体の約程度。ロクロ回転は時計回り。内底にナナ調整。	底部にはへラ記号玄室出土
	足	10.4		体部を欠く。底部中間に浅い凹窓がある。口縁部との境に2条の凹線がめぐる。	体部を欠く。底部中間に浅い凹窓がある。口縁部との境に2条の凹線がめぐる。	底部のへラ切り縫は全体の約程度。ロクロ回転は時計回り。内底にナナ調整。	底部にはへラ記号玄室出土
	無柄	6.6	2.3	天井部は半円。口縁部は内面に浅く折り込まれる。	天井部は半円。口縁部は内面に浅く折り込まれる。	天井部はへラ切り縫は全体の約程度。天井部内面にナナ調整。	天井部にはへラ記号玄室出土
	長脚盆			脚部のみである。ゆるく外側する脚筒部は段を付して端部につく。	脚部のみである。ゆるく外側する脚筒部は段を付して端部につく。	体内部・外側はロクロナナ。内底にナナ調整。	体内部・外側はロクロナナ。内底にナナ調整。
	器 口			脚部下部のみである。端部は内側で支障する。	脚部下部のみである。端部は内側で支障する。	口縁部内面はロクロナナ。底盤内面にシリヤ特がある。	口縁部内面はロクロナナ。底盤内面にシリヤ特がある。
	土器部	9.0	1.1	口縁部は強く外反し、端部は丸くおわる。	口縁部は強く外反し、端部は丸くおわる。	天井部にカキ目を加える。天井部内面にナナ調整。	天井部にカキ目を加える。天井部内面にナナ調整。
	土器部	12.8	2.7	底部はやや丸みをもつ。口縁部は外方にのび、底部は丸くおわる。	底部はやや丸みをもつ。口縁部は外方にのび、底部は丸くおわる。	内面に巻き上げ形がある。外側にはうき目を加える。肩白帯の下方に長方形窓がある。	内面に巻き上げ形がある。外側にはうき目を加える。肩白帯の下方に長方形窓がある。
	土器部	12.6	2.4	口縁部は、底盤から丸みをもって内側ぎみにのびる。端部は丸くおわる。	口縁部は、底盤から丸みをもって内側ぎみにのびる。端部は丸くおわる。	外軸は内切り離し、板底直角がある。内底はナナ調整。体部内・外側はロクロナナ。	外軸は内切り離し、板底直角がある。内底はナナ調整。体部内・外側はロクロナナ。
K 8	丸 罐	16.4	5.5	体部は内側ぎみに外方にのび、端部はわずかに肥厚する。	体部は内側ぎみに外方にのび、端部はわずかに肥厚する。	体部内・外側は相いへラカキ。外底はナナ。底盤は貼り付け。	体部内・外側は相いへラカキ。外底はナナ。底盤は貼り付け。
	馬桶	11.1	22.4	把手を欠く。体部上部に辻口を付す。口縁部は底なし。外方に肥厚する。底部の削りは深い。	把手を欠く。体部上部に辻口を付す。口縁部は底なし。外方に肥厚する。底部の削りは深い。	口部部・体部上半部はロクロナナ。下半部はシラ開り。体部下部に日輪がある。	口部部・体部上半部はロクロナナ。下半部はシラ開り。体部下部に日輪がある。
	白 瓶	14.6		瓶底を欠く。体部は外反ぎみにのび、端部は尖りぎみにおわる。	瓶底を欠く。体部は外反ぎみにのび、端部は尖りぎみにおわる。	体部内・外側はロクロナナ。口縁部内面の物をカス吸収。(瓶蓋)缺。瓶底、瓶底白色。	体部内・外側はロクロナナ。口縁部内面の物をカス吸収。(瓶蓋)缺。瓶底、瓶底白色。
	杯 盆	13.2	4.3	天井部がむずかしくはく。山線部との境は浅い凹窓がある。端部内側にわずかに凹窓がある。	天井部がむずかしくはく。山線部との境は浅い凹窓がある。端部内側にわずかに凹窓がある。	天井部のへラ切り縫は全体の約程度。ロクロ回転は時計回り。	天井部のへラ切り縫は全体の約程度。ロクロ回転は時計回り。
	杯 盆	14.3	3.9	全体に丸みをもつ。天井・口縁部の底は不明顯。端部は尖りぎみにおわる。	全体に丸みをもつ。天井・口縁部の底は不明顯。端部は尖りぎみにおわる。	天井部のへラ切り縫は全体の約程度。ロクロ回転は時計回り。内底に明きがある。	天井部のへラ切り縫は全体の約程度。ロクロ回転は時計回り。内底に明きがある。
	杯 盆	13.7	4.8	全体に丸みをもつ。天井・口縁部の底は不明顯。端部は尖りぎみにおわる。	全体に丸みをもつ。天井・口縁部の底は不明顯。端部は尖りぎみにおわる。	天井部のへラ切り縫は全体の約程度。ロクロ回転は時計回り。内底にナナ調整。	天井部のへラ切り縫は全体の約程度。ロクロ回転は時計回り。内底にナナ調整。
	杯 盆	10.9	4.5	口縁部に比して器部が薄い。天井部は半円。口縁部は外側して、端部は丸くおわる。	口縁部に比して器部が薄い。天井部は半円。口縁部は外側して、端部は丸くおわる。	天井部にへラ切り離し後ナナ調整。	天井部にへラ切り離し後ナナ調整。
	杯 盆	12.2	4.4	立らかがり高 1.4cm。内側し端部は丸い。受部は水平に長くのびる。	立らかがり高 1.4cm。内側し端部は丸い。受部は水平に長くのびる。	底盤のへラ切り縫は全体の約程度。ロクロ回転は時計回り。内底にナナ。	底盤のへラ切り縫は全体の約程度。ロクロ回転は時計回り。内底にナナ。
	長脚盆			脚部のみである。外側する脚筒部は回線を付して端部につく。	脚部のみである。外側する脚筒部は回線を付して端部につく。	底部のへラ切り縫は全体の約程度。ロクロ回転は時計回り。内底に明きがある。	底部のへラ切り縫は全体の約程度。ロクロ回転は時計回り。内底に明きがある。
	手 植	8.4		底部下部を欠く。口縁部は外反し、端部は尖りぎみにおわる。	底部下部を欠く。口縁部は外反し、端部は尖りぎみにおわる。	底部内・外側はロクロナナ。底部外側に日輪がある。	底部内・外側はロクロナナ。底部外側に日輪がある。
K 9	土器部	16.0		底部を欠く。口縁部はゆるく外反し、端部がわざかに肥厚する。体部は球形に近い。	底部を欠く。口縁部はゆるく外反し、端部がわざかに肥厚する。体部は球形に近い。	体部外面は穂・斜列の平行線突起。内面にはシッタ板が残る。口縁部はココナナ。	体部外面は穂・斜列の平行線突起。内面にはシッタ板が残る。口縁部はココナナ。
	杯 身	11.0	3.8	立ちあがり高 0.8cm。強く内側する。底盤は丸みをもつ。	立ちあがり高 0.8cm。強く内側する。底盤は丸みをもつ。	底盤部へラ切り縫は全体の約程度。ロクロ回転は時計回り。内底にナナ。	底盤部へラ切り縫は全体の約程度。ロクロ回転は時計回り。内底にナナ。

#### IV K 7号墳の壁画装飾

K 7号墳の玄室壁面に赤一色で描かれた装飾がみとめられることは、先に述べたとおりである。装飾の描かれた壁面は（1）奥壁腰石（2）左側壁腰石（3）右側壁腰石の三ヵ所である。壁画について述べる前に、颜料と描写手法を述べておきたい。まず颜料は、肉眼観察であるがベンガラであろうと思われる。装飾を施した壁面はいずれも花崗岩の転石のため、結晶のあいだが浸食され細かい凹凸がある。颜料はその凹部によく残存するが、突出した結晶での遺存はよくなく、墨消し剤は使用されてないのである。文様描写では、擦刻や別の顔料による塗り取りではなく、直接赤色顔料を塗布する。筆の使用はみとめられない。凹部での膠着状況からは、顔料の塊りを指でこすりつけるような塗布の手法が想定される。したがって文様の輪郭は明瞭さに欠ける筆みがある。

（1）奥壁腰石 見かけの高さ2.2m、幅2.2mの壁面に、下部を急くほん全面に描かれる。壁面上端から殆どまことに、溝文・同心円文・帯状曲線文を配し、その下部の無文帶ともいえる部分に一個の人物像を描いている。

上部の構図は、四つの文様帯ブロックで構成される。一つは、壁面中央から左よりに左に巻く大きな溝文を2段に2個づつ配する。二つは、その右下辺に、左に巻く溝文2個を下段にして、その上には左・右に巻く溝文を対称的に置くがシンメトリーにはなっていない。三つは、二つめの文様帯の上部に、右に巻く溝文2個と左に巻く溝文1個を無造作に配置する。四つの文様帯は、中央文様帯の左・上辺に三つの同心円文を置き、その外環を繰り返すように細い帯状曲線を描く。一・三の文様帯は、一つの単位文様をくり返して3~4個の図形で構成する。

下部の人物像は、右手を斜め上方にひろげた圓形だが、左手と下半身にあたる部分に顔料がみとめられない。当初より描かなかつたものか、それとも後に剥落したものか不明である。

（2）左側壁腰石 見かけの高さ1.2m、幅1.1mの壁面に、下辺を除くほん全面と上部の小さな壁石2石に描かれる。壁面中央辺に底下物の付着が著しく、部分的に顔料が見えるものの文様としてまとまらない。

いま肉眼で見える文様は、腰石上部を辺の溝文と、上・下辺および右辺の帯状曲線がある。上部の溝文は大きく左に巻き、外周縁は上辺にあり、その圓形は奥壁の第二文様帶のものに類似する。外縁の帯状曲線のうち、右辺上部では縫合が左に巻いており、中央付近でいま一度左へ屈曲していることからみて、溝文になる可能性がある。上辺の帯状曲線は、上部の溝文、右辺帯状曲線の上端に短い垂線によって接続している。下辺の曲線は一部切断部があり、右端部は大きく巻きながら右辺部曲線に接続する。

（3）右側壁腰石 見かけの高さ1.7m、幅1.5mの腰石上部中央に一側の同心円文が描かれる。上下28cm、左右35cmの橢円形で、他の同心円文と同じく帯状に円を描き内部を塗りつぶしていない。

以上のように、K 7号墳の壁画装飾は、溝文・同心円文・帯状曲線文であるが、奥壁で明らかなごとく、溝文を中心的な文様とした構図とみとめられる。ではこうした壁画装飾は、装飾古墳の推移のなかでどのような位置にあるのであろうか。明らかに蔽手文・溝文を壁面装飾に採用した古墳は、次の8例が知られている。<sup>(21)</sup>

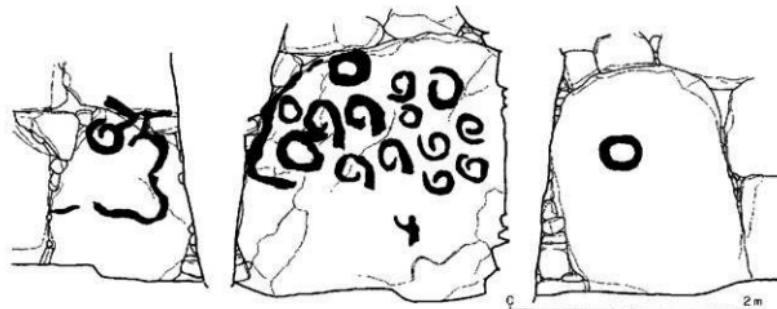


Fig. 15 吉武K 7号墳の壁画装飾 (26)

大田古墳 佐賀県鳥栖市田代  
 鹿毛冢古墳 福岡県久留米市草野町吉木  
 日の岡古墳 福岡県浮羽郡吉井町若宮  
 珍敷塚古墳 福岡県浮羽郡吉井町富永  
 塚花塚古墳 福岡県浮羽郡浮羽町朝田  
 重定古墳 福岡県浮羽郡浮羽町朝田  
 丸山塚古墳 福岡県八女市淀間川  
 王塚古墳 福岡県泰德郡竹町奏命

蔵手文は幾何学的文様である溝文の一種であること、その分布が紀後に及ばないことはすでに指摘されているとおりである。いまのところ藏手文の初現は、6世紀前半の日の岡古墳(Fig. 16-a)にみとめられる。奥壁、側壁に描かれた同心円文・連続三角形文などのあいだを埋める圓形として構図にアクセントをもたらしている。6世紀中葉の王塚古墳(Fig. 16-c)では、丘の岡古墳にみられた圓形とは異なった多様な構図として採用されている。前室の左奥壁・右端、奥室の燈明台石・棺床の前縁端面、同じく棺床仕切りの前縁端面・棺床の右側石内面と、いたるところにこの文様は駆使される。藏手文のみで構成されるものと、他の文様のあいだに挿入されるばあいがある。前室の右奥壁は後者の例であるが、中央に配した騎馬人像を中心圓形として、その上辺と右辺に、対向する藏手文を三個配し、馬の首の下から左辺に三層の溝文がみられる。この溝文はいずれも左に巻きこむもので、外周線先端もカールし、端部を尖りぎみに表現する。古武K7号墳の奥壁文様帶の溝文に類似する文様圓形である。正壇に後続する太田古墳(Fig. 16-d)奥壁腰石の壁面では、4段に重ねた連続三角形文を地文として、そのなかに花文・騎馬人物像・人物像・同心円文・藏手文などを挿入している。大きな藏手文4個はそれぞれ単独圓形として、またいずれも右に巻きこみ外周線端部を上辺に置く表現をとり溝文としたほうがよいかもしれない。

このように、6世紀後半の早い段階までの藏手文・溝文という圓形は、壁面装飾のなかで中心的な文様とはなっていないが、次の段階で大きく変化する。すなわち壁面の構図のなかで中心的な圓形として採用されるのである。塚花塚(Fig. 16-b)では、三角形文・同心円文とともに幾何学的文様として採用される。奥壁の壁面構図は、下半部に同心円文・三角形文を配し、上部に2段に巻いた大きな藏手文を中心にして置き、その左右にも大きな藏手文を配している。さらに丸山塚古墳のばあい、奥壁腰石の中央上部に対向する大きな藏手文を置き、その左右には、それぞれ外側に巻く単独の藏手文と溝文を配し、全体の構図のなかで中心的な役割を果している。また重定古墳では、奥壁の中央に限どりをした大きな藏手文があり、中心飾になっているといふ。

6世紀前半以降の藏手文・溝文の圓形と構図における位置の推移を辿るならば、K7号墳の壁面装飾文様の構成法は、上級した推移の最終形態として理解されるのではないかどうか。

註1 真兵次郎・石山徹南氏から種々教示をういたいた。厚くお礼申しあげる。  
 註2 小林行雄編『美蘇古墳』(平凡社) 1963

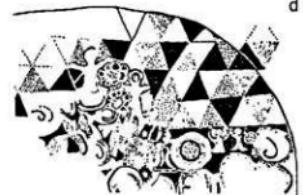
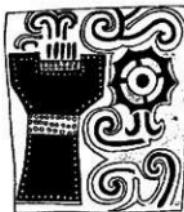
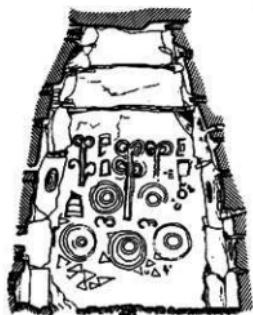
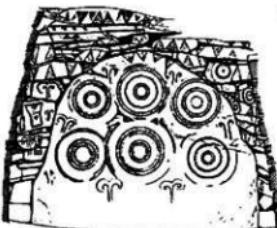


Fig. 16 a. 日の岡古墳 b. 塚花塚古墳  
 c. 王塚古墳 d. 太田古墳  
 a, b は斎藤忠『日本後期古墳の研究』  
 c は坪井清足・町田忠章『壁画・石造物』(日本原始美術大系 6) d は註 2 文献より引用

## V 金武古墳群の構成

金武古墳群は、峯見川西岸の飯盛山東面麓から西山北麓にかけての丘陵部、およびそのあいだに広がる日向川の扇状地上に分布し、東西1.2km、南北1kmの範囲に、145基の小円墳（1978年度分布調査による）からなる後期群集墳である（Fig. 2）。本古墳群の周囲に連続する古墳の分布はみとめられず、他の古墳群との境は明瞭である。換言すれば、きわめて限られた墓域のなかで造墓活動が行なわれた結果とみることができよう。

われわれは、古墳の立地、分布状況等を勘案して、金武古墳群145基を26の支群にグループ化し、扇状地を境に北側に分布するものを吉武A～R群、南側のものを乙石A～II群と呼称している。個々の支群は、単位墳（1例）を除くと、1単位群（一つの造営主体による累積墓群）からなる支群、あるいは数個の単位群で構成される支群が通常である。また、終末段階において、集中的に分布する支群などもみとめられ、各支群は多様な構成をしめす。換言すれば、それぞれの支群は均一なそれでなく、じつに個性的な存在といえるのである。

それでは、大形群集墳として金武古墳群がどのような形成過程を辿り、それがいかなる歴史過程を表出しているのであろうか。早良平野における群集墳の推移を勘案しつつ考えることにしたい。

### 横穴式石室の編年

金武古墳群の古墳内部主体（埋葬施設）は、いま知られているかぎりすべて横穴式石室である。これまで発掘調査された20基の石室と、形態の知りうる石室を観察した結果から、おおまかにⅢ期8段階の形式を設定することができる。

#### I期

豊穴系横口式石室とその系譜を引く構造の横穴式石室である。

1段階 豊穴系横口式石室。<sup>(注1)</sup>吉武L6号墳の石室は、腰石の一部しか残存していないため断定しえないが、一応豊穴系横口式石室とし、この段階と考えておきたい。

2段階 吉武L1.4・7号墳石室が該当する。豊穴系横口式石室に比べて、玄室幅が広くなり玄室空間の拡大が求められている。抽石前面には「ハ」字状に聞く短い貼石状の石組が設けられるだけで、狭道状の石組はない。石室の上半部を欠くため壁体構造は不明である。他の例から推して、壁石は絶して小さく上部にいくにしたがって壁体を持ち送る。腰石も小形のものが通有である。

3段階 吉武L3・5号墳石室が該当する。<sup>(注2)</sup>玄室平面形は前段階からあまり変化しないが、やや幅広の傾向がある。抽石前面の貼石状の石組は長さを増すとともに、床面が玄室より一段高いのが特徴的である。狭道状の石組みは粗雑で、天井石の架構は考えられない。この点は、石室の閉塞部が抽石のすぐ前面にあることから例証される。

I期の石室は、定型化した豊穴系横口式石室から埋葬空間の拡大（幅の拡大によって求められる）と、抽石前面石組の長大化という一定の推移を辿る。3段階にあたる時期には、一部に定型化した両袖型石室の造営が開始されており、こうした影響のもとに狭道状の石組の長大化が進んだと思われる。

#### II期

天井石を架構した狭長な狭道部が成立し、定型化した両袖型石室が採用される段階である。II期では玄室構造に二つのタイプが出現する。一つは、玄室の長さが幅の1.8倍以上と狭長な石室（Aタイプ）、いま一つは1.8倍以下の通有な石室（Bタイプ）である。Aタイプ石室は、奥壁に3～4段の三石をほぼ垂直に積みあげる。奥壁・前壁と左・右側壁にかけわたすいわゆる力石の使用は少ない。これに対してBタイプ石室では、腰石上部の腰石は小ぶりで、力石を多用しながら上部壁体を強く持ち送る。したがって、Aタイプ石室のばあい玄室天井石は3～4石、Bタイプ石室では1～2石で構成されることが多い。

1段階 A・Bタイプ石室のはかに、ほぼ正方形に近い玄室プランのものがある。Aタイプ石室としては吉武J4号墳、Bタイプ石室では吉武M2号墳などがある。また、吉武P10号墳が方形玄室である。

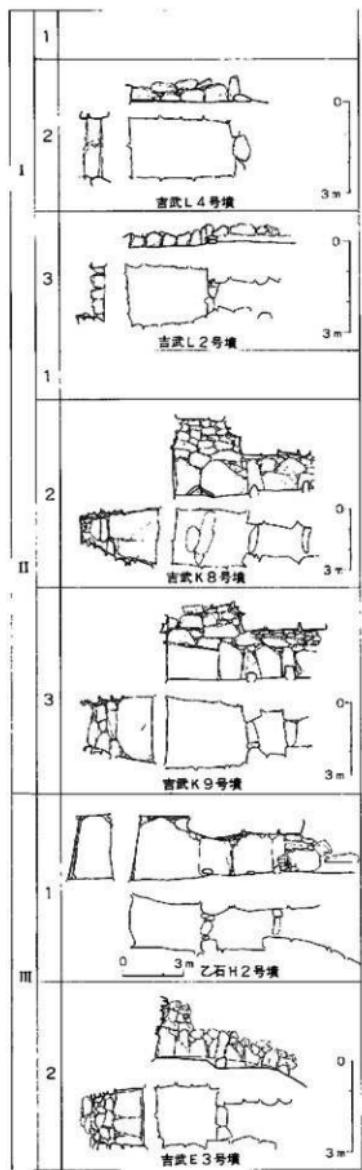


Fig. 17 金武古墳群横穴式石室構年略表

この段階の石室は、玄室の高さが最大限に求められる点がきわどっている。すなわち、A・Bタイプの石室を問わず、玄室の高さは羨道部の2倍以上である。この段階の石室調査例がないため羨道部について詳細は知りがたいが、その長さは玄室の長さに等しいかややそれを上まわる程度と予想される。

**2段階** A・Bタイプとも継続する。Aタイプは吉武O3号墳、Bタイプとしては吉武K8号墳などがある。この段階では玄室の高さが低くなり、羨道部の高さの2倍に企画されている。玄室プランでは前段階と大差ないが、羨道部は玄室長の2倍を超えない範囲で長さを増す傾向にある。

**3段階** A・Bタイプとも継続する。Aタイプとしては吉武K10号墳、Bタイプとしては吉武K9・P9号墳などがある。石室平面图形のうえでは、前段階に比べてA・Bタイプとも玄室の長さが短めになるとともに、羨道部が長さを増し、玄室長の2倍近いものもある。壁体構造では一つの転換期といえる。玄室の高さは羨道部高の2倍以上と低くなり、それに伴って周壁上部の持ち込みは弱くなる。したがって、玄室の断面形は箱形に近いものとなる。こうした壁体構造の変化は、いわば築造技法の簡略化へと向う過程にあるといえる。

また、前段階までの石室企画尺度は、すべて晋尺系尺度（1尺≈24~26cm）であったのに対し、この段階では一部に高麗尺（1尺≈35cm）を採用したのではないかと想定される石室もみられる。

### III期

石室平面图形の企画が高麗尺に統一されると同時に、新たに正方形プランの玄室が成立する。いわゆる巨石・巨室墳はこの期の初め頃に出現するが、人勢においてはII期3段階にみられた石室築造技術の簡略化が進み、石室規模も一段と小形化する。

**1段階** 玄室平面形の差異から前・後の2時期に区分できるようだが、前半期の継続年数が比較的短かったと推測され、石室例も少ないため区分していない。II期にみられたA・BタイプのうちAタイプの石室は消滅し、Bタイプ石室が主体となる。

前半期の石室は玄室平面形が箱形であるが、後半期には正方形の玄室プランには統一される。羨道部は古墳の立地に左右されるもののもっとも長さを増し、玄室長の2倍程度のものが多い。玄室の高さは前段階よりさらに低くなり、袖石の冠石上に玄室天井石が架構される。

この段階の終末には、玄室の幅が長さを上まわり、羨道の短い石室が出現する。いわば次段階石室の粗型といふべきものである。前半期に属する石室は乙石H 1・2号墳、後半期には乙石C 1・2号墳、末期には乙石C 3号墳などがある。

**2段階** 石室の小形化と、墓造技術の簡略化が著しく、埋葬空間ではないため羨道部は形態化していく。前段階の終末に出現した幅が長さを上まわる玄室が多い。羨道部は、狭長なプランから幅広の短いプランに変化している。天井石を架構しない簡略形態であり、したがって壁体の構成は粗雑である。II期1段階以降おこなわれてきた羨道部に2個所の棺石を配置する手法は、この段階では失われている。吉式E 3・4・5号墳などがある。

以上のように、金武古墳群の横穴式石室はおおまかにⅢ期8段階に区分される。Ⅲ期1段階のように細分が必要な部分もあるが、細部については今後の調査の進展に待ちたい。つぎに比較的豊富に出土する須恵器によって各段階の造営年代を想定しておきたい（須恵器の編年分類は小田富士雄氏案による）。そのばあい、当然追跡による複数の年代の須恵器があるわけで、当該古墳でもっとも遡る一群を抽出するが、なかには出土須恵器が少なく、はたして造営期をしめすか否か判断しえないものもある。検討結果を記すとつぎのとおりである。

I期1段階（吉式L 6号墳）	…	II A期	6世紀初頭～前半
2段階（吉式L 4・7号墳）	…	II B期	6世紀前半
3段階（吉式L 2・5号墳）	…	III A期	6世紀前半～中葉
II期1段階（調査古墳例なし）	…	III A期	6世紀中葉
2段階（吉式K 8号墳）	…	III B期	6世紀中葉～後半
3段階（吉式K 9号墳）	…	III B～IV A期	6世紀後半～末
III期1段階、前半（乙石H 1・2号墳）	…	IV A期	6世紀末～7世紀初頭
・後半～末（乙石C 1・2・3号墳）	…	IV B期	7世紀後半
2段階（吉式E 3・4・5号墳）	…	V（新）～VI期	7世紀後半～末

以上の年代も、須恵器の型式変遷はともかく、その実年代と一型式の年代幅については本だ確実なところではないようであり、一つの目安程度と考えておきたい。とくに、II期1段階のばあい、前・後する段階との一部重複が予想され、その造営期間は他の段階に比して短かく10年前後と想定される。

### 金武古墳群の形成過程

以上の横穴式石室の編年を基準にして、形態の知りうる古墳を検討した結果はTab. 4にしめすとおりである。まず金武古墳群全体の形成推移をおおまかに通観してみよう。

表のデータがしめすごとく、各期ごとの古墳数はI期5、II期65、III期45、不明30となる。さらに各段階に区分してみると、I期では1段階に1基、2段階2基、3段階2基である。II期では、1段階に9基、2段階に13基、3段階に27基、埋蔵段階不明のもの16基である。III期では、1段階22基、2段階9基がまとめられる。III期での埋蔵段階不明の古墳は13基であるが、壇丘・石室規模の小さなものが多く、その大半が2段階に属するのではないかと推測される。つまり、2段階の古墳は20基を前後する数と想定してもさほど誤りないであろう。

こうした推移をいま少しく述べてみよう。先に述べたように、II期1段階の造営期間はさほど長期にわたるものではなく、とくに2段階とは一部重複することも推測される。この点からすれば、II期1・2段階の古墳は、1期から継続する吉式I群を除いて、いわば各支群における造営開始期のわずかな年代の差異と理解される。換言すると、大形群集墳としての開始期は、まさにII期1・2段階にあるといえる。この1・2段階での造営古墳は計22基となり、3段階の27基、III期1段階の22基には等しい数となる。II期1・2段階以降、III期1段階までの各段階の造営年代幅はほぼ20～30年と考えられる。したがって、この3つの段階に属する古墳数に、さほどの増減がみられない事実は、同一の造営主体による継続的な造墓活動の結果と把握されるのではなかろうか。より具体的に述べれば、II期1・2段階～III期1段階では、22～27基に年代不明な古墳を加えて30～35の造営主体による2～3回の累積的な造墓と理解されるのではないか。III期2段階でも20基を前後する古墳がまとめ

Tab. 3 金武古墳群古墳計測表

Tab. 4 時期別造営古墳数一覧

	I			II			III			不明	計	
	1	2	3	1	2	3	不明	1	2	3		
吉武A群						2		1			2	5
B群					3	2		3	1	1		10
C群								1		1	4	7
D群							2	2	4	3	1	12
E群									3	2		5
F群							1				1	2
G群			1			3						4
H群						1	3	1		4	1	10
I群											6	5
J群				1	1	4	2					8
K群				1	2	3					6	12
L群	1	2	2	1	1	1						8
M群			1			1		1				3
N群						1	1			1		3
O群						1		2			1	5
P群				1	2	3		1	1	1	1	10
Q群											2	2
R群				1				1				2
乙石A群							1	2				3
B群					2	1	1	1		1	1	7
C群								2				3
D群						1						1
E群						1	2				1	4
F群				1	1	3	2	1				8
G群											3	3
H群								2				2
小計	1	2	2	9	18	27	16	22	9	14	30	145
計		5			65				45			

られ、前段階からの継続が予想されるが、年代的に中断することもあるので別に述べる。

以上の検討は、古墳群全体としておおまかな群の形成推移を辿ったわけであるが、それでは各々の支群が、具体的にどのような過程で形成されてきたか、墓域・造墓期間・造営主体の三つの構成要素を軸に、いくつかの代表的な支群について分析をおこなうことにしてみたい。

#### 吉武I群 (Fig. 18)

群の東端に近く、日向川刷毛地に位置する。農地改善事業のため、1979年に調査された。この支群は、南から北にゆるく傾斜する南北150m、東西60mの範囲に8基が比較的密集して分布する。8基とも周溝をめぐらした円墳で、内径は8~16mと差異がある。埋葬施設はすべて横穴式石室であるが、堅穴系横口式石室、およびその系譜を引く石室があり、金武古墳群中もっとも早く造営の始まった支群として注目される。

報告は、4・7号墳石室を堅穴系横口式石室、2・5号墳石室はその系譜を引く石室、他は定型化した圓柱形石室であり、出土遺物からも、4・7・2・5・6→8→1・3号墳の造営推移が辿れるとして、4・7号墳を6世紀前半、1・3号墳を6世紀末と述べる。その大要について異論はないが、金武古墳群のなかでの位置、支群としての具体的な分析などに不充分な点が少なくない。まさに金武古墳群形成の第1歩を踏みだした開創期の支群であり、その個性的な支群形成と特質は充分に検討されねばならない。

まず、各古墳の造営年代であるが、6号墳はすでに述べたように1期1段階に属し、いまのところもっとも遅い古墳例といえる。ついで2段階の4・7号墳、3段階の2・5号墳が造営される。II期では8号墳が1段階、1・3号墳を6世紀末としているが、3号墳の出土須恵器にはII期B期に属するものがあり、3→1号墳という造営推移が考えられる。このようにみると、本支群の構成は造営の開始・終焉期に若干の差異があるものの、ほぼ時間的に平行する二つのグループに区分され、それは古墳の平面的位置関係からも指摘できる。これを墓域の差異とみると、二つのグループはそれぞれの墓域内で累積的な造営活動をおこなった結果と把握できる。

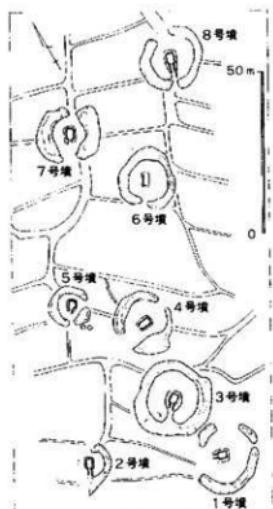


Fig. 18. 古武J群古墳配置図  
(『古武原魚古墳群』を一部変更)

葬者に対する供獻と看取されるのである。そのほか、新羅七器・鑄造鉄斧など朝鮮半島からの渡来文物もある。こうした渡米系文物の副葬と製鉄・鐵治に関連する鉄滓の供獻は、本支群の造営主体の強い便性をしめすものといえよう。

#### 吉武K群

日向川扇状地のなかに残る長さ約600mの独立丘陵上に分布する。古墳は丘陵斜面、尾根上に立地し、12基で構成される支群であるが、3~5号墳の3基は消滅し、現存9基である。今回調査の対象となった6~9号墳はK群でも中央から北側に下る尾根上に位置している。

支群内の古墳分布は、一見アラランダムにみえるが、仔細に観察すると古墳の立地・集合状況から、いくつかのまとまりがあることに気付く。1・2号墳、7・8号墳、10・11号墳がそれである。1・2号墳は丘陵尾根縁よりやや下降した斜面に造営され、石室はともに西に開口する。2号墳はⅡ期1段階に属する。1号墳の石室は破壊され不明である。7・8号墳はすでに報告したとおりで、7号墳はⅡ期3段階、8号墳はⅡ期2段階に属する。両者とも玄室幅は他に例のない晋尺系尺度の9尺を採用する。10・11号墳のばあい、10号墳がⅡ期3段階、11号墳の石室は埋没しており不明である。明確な造営年代の推移が知られるのは7・8号墳にすぎないが、これらの近接した古墳配置が、限られた墓域内での造営を意味するならば、それは一つの造営主体による累積的な造営の結果と把握される。このようにみると、すでに消滅した3~5号墳は一つの单位群としての可能性もある。残った6・9・12号墳のうち、6・9号墳は単独的な位置にあるものの、6~9号墳という造営年代の推移から、墓域を移動した同一の造営主体を想定することもできるのではないだろうか。12号墳は全く不明である。

つまり、吉武K群は12号墳を除いて、5つの造営主体による2~3回の造営活動の累積と把握される。現在残っている古墳でみると、各單位群は遅くともⅡ期2段階に造営を開始し、3段階には終了Ⅲ期の古墳はみられない。こうした事実は、扇状地の北側に分布する古武J・L群に共通している。

#### 乙石F群

日向川扇状地の南側、西庄の山麓部斜面に8基で構成される。もっとも高い1号墳で120m、低い7号墳で約80m、小さな谷地形の入り組んだ複雑な斜面に散漫な分布をしめす。いずれも径10m前後の小円墳だが、7号墳の

のではないだろうか。すなわち、6世紀の初め頃に6号墳が、つづいて前半で相前後して4・7号墳が造営されたが、この段階で6→7号墳という系譜の造営主体とは別に、4号墳の造営に始まる新たな造営主体が出現したといえる。前者をa単位群、後者をb単位群とすれば、a単位群は6→7→8分段墳、b単位群は4→5→3→1号墳という累積的な造営と理解されるのである。a単位群は6世紀後半の早い段階で造営を中止しているのに対し、b単位群では6世紀末の近くまでおこなっている。そこで問題になるのはb単位群の南にある2号墳の存在である。1期3段階に属し、單独墳とも考えられるが、位置的にみてb単位群に包括したほうがよいであろう。そのばあい、5号墳中の同段階の5号墳との先後関係が問われる。出土埴輪器からは2号墳が先行すると考えられるのでb単位群中に含め、4→2→5→3→1号墳という造営過程を想定しておきたい。

調査遺物をみると、武器・馬具の比率が高いこと、8基のすべてから鉄滓が出土したことは注目される。その大半は古墳の周溝からの出土であるが、玄室や埴丘盛土中、埴丘底面などから出土したものもある。5号墳では周溝の外側に2個のビットがあり、鉄滓のほか鷹羽羽片などが出土している。こうした鉄滓の出土状況は、すでに述べたことがあるように、後世の混入品ではなく、古墳(被葬者)に対する供獻と看取されるのである。そのほか、新羅七器・鑄造鉄斧など朝鮮半島からの渡来文物もある。

吉武K群

日向川扇状地のなかに残る長さ約600mの独立丘陵上に分布する。古墳は丘陵斜面、尾根上に立地し、12基で構成される支群であるが、3~5号墳の3基は消滅し、現存9基である。今回調査の対象となった6~9号墳は

K群でも中央から北側に下る尾根上に位置している。

支群内の古墳分布は、一見アラランダムにみえるが、仔細に観察すると古墳の立地・集合状況から、いくつかのまとまりがあることに気付く。1・2号墳、7・8号墳、10・11号墳がそれである。1・2号墳は丘陵尾根縁よりやや下降した斜面に造営され、石室はともに西に開口する。2号墳はⅡ期1段階に属する。1号墳の石室は破壊され不明である。7・8号墳はすでに報告したとおりで、7号墳はⅡ期3段階、8号墳はⅡ期2段階に属する。

両者とも玄室幅は他に例のない晋尺系尺度の9尺を採用する。10・11号墳のばあい、10号墳がⅡ期3段階、11号

墳の石室は埋没しており不明である。明確な造営年代の推移が知られるのは7・8号墳にすぎないが、これらの

近接した古墳配置が、限られた墓域内での造営を意味するならば、それは一つの造営主体による累積的な造営の

結果と把握される。このようにみると、すでに消滅した3~5号墳は一つの単位群としての可能性もある。残った

6・9・12号墳のうち、6・9号墳は単独的な位置にあるものの、6~9号墳という造営年代の推移から、

墓域を移動した同一の造営主体を想定することもできるのではないだろうか。12号墳は全く不明である。

つまり、吉武K群は12号墳を除いて、5つの造営主体による2~3回の造営活動の累積と把握される。現在残

している古墳でみると、各単位群は遅くともⅡ期2段階に造営を開始し、3段階には終了Ⅲ期の古墳はみられ

ない。こうした事実は、扇状地の北側に分布する古武J・L群に共通している。

乙石F群

日向川扇状地の南側、西庄の山麓部斜面に8基で構成される。もっとも高い1号墳で120m、低い7号墳で約80

m、小さな谷地形の入り組んだ複雑な斜面に散漫な分布をしめす。いずれも径10m前後の小円墳だが、7号墳の

みが径20mを越す規模である。古墳の位置は、標高120m付近に1・2号墳、30m付近に3・4号墳と、谷をはさんで8号墳が、80m付近に5・6号墳と7号墳がある。分布状況から明らかなように、2基が隣接して造営された3つのグループと、2基の単独墳がまとめられる。各墳の造営年代をみると、5号墳がⅢ期1段階とともに先出し、2号墳が2段階、3・4・8号墳が3段階、1号墳はⅢ期1段階である。6・7号墳はⅡ期であるが帰属段階が不明である。グループごとにまとめると、2→1号墳、4→3号墳、5→6号墳という造営推移がまとめられ、それぞれの造営主体が限られた墓域内で造営をおこなった結果と把握されるのである。では、単独墳たる7・8号墳はどのように理解すべきであろうか。8号墳はⅡ期3段階、7号墳は折上天井（合掌形天井）構造の往々される石室だが、石室の大半が埋没しⅡ期であることしかわからない。しかし、石室規模からみた前壁高の比率は低く、3段階の可能性が強い。こうした単独墳的な傾向にある古墳は、他の支群でもいく例かみとめられるが、その多くがⅢ期3段階に属するようである。このように、結果として単独墳的な様相をしめすに至る経緯は種々あると思われるが、次のような状況が想定される。一つは、当該造営主体において次段階（Ⅲ期1段階）に新たな造営をおこなう契機のなかったばかりであり、換言すれば一勢に造営の中断される7世紀前半のあいだに、古墳造営の対象となるべき人物の死が生しなかったばかりである。その二つは、造営主体が新たな墓域を獲得し、その結果次段階では異った墓域で造営したばかり、その三は、造営主体の崩壊したばかりなどが想定される。二については、Ⅲ期1段階になって新たに造営を開始する支群の存在からある程度予想される。三についてはそれが内部的あるいは外部的な要因にせよ、考古学的に明らかにすることは困難である。まさに個々の造営主体の動態が古墳造営に表現されていることが知られるのである。このように、墓域内に次段階の造営をみない契機がいずれにせよ、7・8号墳の存在は、それぞれの造営主体が墓域占有者として造営をおこなった結果なのである。その点では、7・8号墳の造営主体は、本文群中もっとも遅れた段階に、古墳造営に表現される政治過程に突入したと理解される。つまり、乙石群は5つの造営主体によって形成された支群なのである。

#### 乙石H群

日向川扇状地の基部南端に造営された2基の大形円墳群である。1978年に調査された。2号墳は径30m、1号墳はすでに墳丘が削平されており正確な数値は不明だが、石室規模からは2号墳と同程度の規模が推測される。石室は1号墳が单室、2号墳は巨石を使用した複室構造で、ともに石室全長10mをこえⅢ期1段階（古）の造営である。当該期はもちろん、金武古墳群中最大の墳丘・石室規模である。出土須恵器はわずかに2号墳が先行するようだが、おそらく10年未満の短い差異であろう。石室内は攪乱をうけているため遺物は多くないが、1号墳からは、武器・馬具・五鉤鏡のほか、北部九州では少ない鐵釘留めの木棺を埋置しており、釘とともに八花文の鐵製環座金具が出土している。2号墳でも、武器・馬具のほかに錐子や青銅製舟釘が出上した。そのほか1・2号墳とも供獻鉄律が出土している。

本支群は造営年代の近接した2基のみで造営され、周囲に先行する古墳は存在しない。西に隣接して乙石G群（3基）があったが、すでに消滅し詳しいことはわからない。しかし径10m前後の小形円墳であったといわれ、本支群に直接関連するとは考えられない。こうした事実から、本支群は7世紀を前後する頃に、単独かつ新たな墓域として獲得され、造営がおこなわれたとみる。同一墓域に先行するⅡ期段階の古墳が存在しないことは、この2基の造営主体が新たに出現したとみるか、あるいは既存の造営主体の成長による新たな墓域の獲得による移動と考えられる。いずれにせよ、1・2号墳は、墳丘・石室とも小形化が進行するなかで、他の小形円墳とは比較しえないので圧倒的な規模をもつ大形円墳であり、いわば首長墓と想定しうる内容である。それでは、7世紀を前後する頃の古墳群の位相は奈良にあるのであろうか。金武古墳群形成過程の大きな歴期であり、この点は後述したい。

#### 吉武D・E群

日向川扇状地に突き出た山麓尾根稜の南面する急斜面に位置する。小さな開析谷を挟んで東西に分布し、D群12基、E群5基が確認されている。そのうちE群3～5号墳の3基が1978年に調査された。

E群3～5号墳は、径6～7mの不整な円墳で、石室も5m未満と小形であり、Ⅲ期2段階に属する。石室内

が搅乱されているためか遺物はきわめて乏しく、武器・馬具は出土していない。ここでも鉄律の供献率は高く、3基とも出土している。須恵器の出土が少なく造営年代の推定が難しいが、3・4号墳は7世紀末、5号墳は7世紀後半の初め頃と考えられる。5号墳のはあい、7世紀末頃までの須恵器を含み追葬が想定されるが、3・4号墳はいわば単次葬の可能性が強い。未調査の1・2号墳は、石室の大半が埋没しており詳細は知りえないが、ほぼ方形の玄室プランと小形である点から、3～5号墳と同様に田期2段階に属する可能性が高い。

D群はE群と同様の急斜面に分布するが、下落するにしたがって傾斜が弱まり、小さな尾根状地形となる。その部分にはⅡ期の古墳2基（9・11号墳）とⅢ期1段階の12号墳があり、石室形態の推移から11→9→12号墳という累積的な造墓と考えられ、1つの造営主体の墓域となっている。ところが、その上部急斜面にはE群と同様の小形石室を有する小円墳9基が、裾を接するように隣接して造営されている。すべてが天井式を欠き、石室内部に土砂が充満しているため詳細の知られる古墳は少ない。しかし石室全長が3～5mと小形でありⅢ期2段階の古墳とみて誤りないとと思われる。

この段階の古墳は、性にも吉武M・P群のように6世紀後半から継続する墓域内に造営された例もあるが数少なく、上記したD・E群とそれに接するC群の上部に集中した分布をしめすのである。こうした分布は、6世紀後半以降の造営主体を単位とした墓域内での累積的な造墓とは異なった位相にあるのではないか。すなわち、その大半が追葬をおこなわない単次葬墳であり、一基の古墳がかつての単位群造営主体を表現している。もはや古墳の造営は、造営主体を代表（掌握）する人物一人を埋葬するためにのみおこなわれた。かかる変質こそ、6世紀後半以降の金武古墳群造営主体をして、共通の墓域を設定させたのではなかろうか。

### 金武古墳群の画期と特質

以上、古墳群の開始期から終末に至る代表的な6つの支群について検討を加えてきた。再度くり返すようだが支群の分析を通して把握された事実と、留保してきた問題点について整理し、群形成過程における画期と群の特質に言及したい。

はじめに指摘されることは、各支群は単一的な形成過程ではなく、実に多様な形成状況を表出しているということである。単独墳的なものから、2～5つの単位群によって形成されるもの、あるいは終末期のように墓域設定に造営主体をめぐる状況の変質を反映するばかりなどもみられる。こうした終末期を除けば、支群を構成する基本的な単位は、一つの造営主体による限られた墓域内の累積的造墓群（単位群）であることに変わりない。先の支群分析をおこなう前に、各帰属段階ごとの古墳造営数から、金武古墳群の造営主体について30～35という概略を想定しておいた。図上のように各支群を仔細に検討した結果、それをやや上まわる40～45前後の造営主体の存在が把握された。こうした造営主体を「いくつかの世帯をふくんだ血縁関係の強い集団としての世帯共同体」とし、当該共同体の集落における実体を「4～5棟」前後の住居で一定のグループ形成した単位とみると、金武古墳群の背景には、6世紀後半に200棟前後からなる集落が想定される。かかる住居群を含む大集落は、これまでの早良平野の調査例でも存在しないし、また想定することも困難である。ならば、金武古墳群は「複数の集落を構成する（世帯共同体の）家父長層が、何らかの要因で（広い意味の）墓域を共同にされた結果」（括弧内は筆者）形成されたと考えたい。

つぎに、支群分析を通して想定された金武古墳群形成状況をめぐる五つの画期について考えてみよう。

まず第一の画期は、6世紀前半の吉武L・6号墳の出現である。次の段階になって吉武I群はいま一つの造営主体（4号墳）が出現するが、まだ他の支群での造墓はみとめられない。第二の画期は、6世紀中葉から後半の早い段階に始まる圧倒的な造墓活動である。第三の画期は、7世紀を前後する頃の乙石H群の造営であり、第四の画期は大半の支群における造墓の停止という事実である。第五の画期は7世紀後半から末にかけての単次葬墳に象徴される終末期の古墳の造営である。こうした五つの画期は、金武古墳群のみならず早良平野における群集墳をめぐる状況の表出と思われる。ではその実体はどのようなものなのであろうか。

6世紀前半に吉武L群の二つの造営主体が相前後して、古墳造営に表現される政治過程に突入する。早良平野

における群集墳の開始期をみたばあい、金武古墳群はもっとも早い段階の一つである。この時期に開始された群集墳は、高崎古墳群<sup>(1)</sup>、町方古墳群<sup>(2)</sup>、羽根戸古墳群<sup>(3)</sup>、西油山《山崎》古墳群<sup>(4)</sup>、飯倉古墳群などが知られている。報告書未刊のものが多いため、その実態は充分に整理しえないが、古墳埋葬施設は整穴系横口式石室あるいはその系譜を引く横穴式石室（たとえばⅠ期1・2段階）である。いまのところ5世纪代に遡る例ではなく、早良平野での群集墳の開始期は概ねこの段階と考えられる。したがって早良平野では、6世纪前半頃に群集墳造営開始によって表現される政治状況を向えたと考えてよい。吉武1群の造営主体をはじめとして、いくつかの古墳群の造営主体が造墓を開始したことを意味するが、この時期の古墳数は少なく、6世纪後半以降の造営主体との性格の差異が想定される。その解明は今後の課題である。

6世纪中葉から後半の始めにかけて、爆発的とも表現される群集墳の造営は、金武古墳群における第二の高潮である。26の支群のうち11の支群で造営が開始される。すでに消滅し開始期不明の支群や、終末期の支群もあるので大半の支群で造営が始ったと把握される。早良平野に分布する群集墳の多くがこの時期に造営を開始している。7世纪の前半に至るは250~60年のあいだに、一つの造営主体が2~3回の造墓をおこなうことになったのである。いわば群集墳の造営で表現される政治過程、支配方式に、ほとんどの古墳造営主体としての世帯共同体が取り込まれたと想定される。また、北部九州の群集墳を分析した佐田茂氏は、この段階の早い時期に始まる群集墳を「盛期の群集墳」、6世纪末頃に始まり7世纪中頃まで継続するものを「終末の群集墳」として区別している<sup>(5)</sup>。たしかにⅡ期3段階に造墓の始まる単位群もある。こうした状況が、はたして群集墳形成過程をめぐる状況として一つのエポックとなりうるのか、それとも造墓の契機たるべき人物の死の先後差といった時間の差なのか、今後検討される必要があると思われる。

第三の高潮である乙石Ⅰ・Ⅱ号墳という、首長墓に比すべき大形古墳の造墓は何を意味するのであろうか。7世纪を前後する頃に径30mの規模と巨石・巨室を有する古墳例は、早良平野ではむろんこの二點のみである。北部九州においても、この時期の大形円墳は前代からの前方後円墳の系譜の最終段階に出現する例が多く、このように群集墳内に突如として造営されることは少ない。この2基の大形古墳に先行し、直接的な系譜を辿れる古墳の存在しないことは先に述べたとおりである。いずれにせよ、乙石Ⅱ群造営の契機は大形群集墳としての金武古墳群の特質を理解するうえで重要な面である。乙石Ⅱ群造営の意味するところを、誤解を怖れず述べるならば次のとおりである。論証は後にまわすとして、まず金武古墳群が形成されるに至った要因として鉄生産が想定される。具体的にいうと、金武古墳群を形成した各造営主体は、何らかのかたちで鉄生産にかかわる職掌を担うことによって、擬制的な同族關係を形成し、墓域を共有するに至ったのではないかと。早良平野での6~7世纪の鉄生産研究は、その緒についた段階ではあるが、一定程度明らかになりつつある。概要を記すと、原料はチタン分の少ない高品位の砂鉄（早良平野を周囲する山塊はすべて花崗岩であり、その風化土壌（マサ）には2%程度が含有されている）を使用し、遅くとも6世纪後半には開始されたと思われる。平野内で鉄滓を出土する遺跡は100個所を超える（Fig. 1 参照）、奈良時代には鉄生産に関連する官衙（下山門敷町遺跡）も出現している。古墳時代後中期の鉄生産に関する事実として、平野内で調査された群集墳のなかに供獻された鉄滓を出土する例が多く、これまで45基の古墳で鉄滓が出土している。金武古墳群のばあい、調査古墳20基のうち15基から鉄滓が出土し、きわめて供獻率の高いことが指摘される。重要な点は、群開始期の吉武1群8基のすべてから鉄滓（鐵治・製鐵滓）<sup>(6)</sup>が出土し、鉄生産の初現を6世纪中頃まで引きあげることが可能になった点である。ところが、他の古墳群での古墳埋葬年代は6世纪末前後を上限としている。屋上にさらに層を重ねるようであるが、こうした事実こそ、金武古墳群の造営主体に鉄生産に関わる職掌を想定した由縁でもあり、また平野内での鉄生産にもっとも早く携わった集団と推測されるのである。先に述べた鉄滓供獻年代から想定されることは、6世纪末を前後する頃の平野内各地への鉄生産の拡大である。その内容については知りがたいが、こうした新たな生産の拡大は以前より鉄生産を主導してきた金武古墳群被葬者集団の統率者（鉄生産体制上の）の政治的位置を一気に押しあげる結果をもたらしたのではないだろうか。概論すれば、彼は早良平野内の鉄生産總体を統括する立場に自己を高めたのかもしれない。こうした状況を契機として大形古墳の乙石Ⅱ群の造営が可能になったと考えたい。以

上のように推測するならば、乙石日群の直接の先祖たる、開始期からの吉武し群に求めることが可能になる。とりわけ単位群は、8号墳（二期1段階）を最後に造墓を中止しており、歴史の背景をもとに新たな墓域を獲得したと考えておきたい。

第四の時期、すなわち7世紀前半における前代からの限られた墓域内での造墓の停止は、早良平野では一般的であるが、先に述べた佐田茂氏の「終期の群集墳」では中葉～後半までの造墓がみとめられるという。この点も今後具体的に検討する必要があろうと思う。

最後に、終末期の造営の意味を考えねばならない。支群分析の項に述べたように、この段階の古墳は单次墓群を主体とともに、從来の墓域を放棄し、新たに当該期のみで形成される墓域内に造墓されることが多い。金武古墳群のはあい、終末期と推測される古墳数は約20基前後であり、時期不明古墳やすでに消滅した古墳を勘案すれば、群の造営主体の数40～45とはば何處かやや少なめと思われる。概ね単位群の造営主体層が一基づつ造営したと考えてもよいかもしれない。しかし、单次墓群であることから知られるように、世帯共同体を掌握する家父長の死が造墓の契機となることは前代と変わることはないにしても、共同体内における家父長権の強化と、ヤマト政権による支配方式の変容が看取される。ところで、終末期の古墳造営数は必ずしも前代の造営主体の数に比例しない。むしろその数は少なく、いま知られている例としては、羽根戸・白塔・三郎丸・駿ヶ原・大谷・倉瀬戸古墳群などに数基づつとみられる程度である。調査が進めば若干の増加は予想されるが、大幅な増加は難しい。金武古墳群のような数多くの造墓はむしろ異例なのかもしれない。だとすれば、この段階の造墓は前代の造営主体の純体がおこなったものではなく、特定の集団（複数の造営主体を含む）によってのみおこなわれたのであり、もやは古墳造営を政治関係の表現とする段階とは異った位相にあると思われる。

註 1 二宮忠司「古墳像古墳群」（福井市立文書収集第54号）：1980

2 石井平野图形の企画と使用尺度については次の文献を参照されたい。

柳沢一男「石井平野图形の企画について」『片川古墳』所収

1973 B 「播磨式石井平野图形の特徴」『相模古墳群』所収 1970

C 「北部九州における初期播磨式石井图形」『九州考古学の問題』第5号：1975 D 「總括」『古石古墳群』所収 1977 など（の）

注 2 文部省所蔵 1980

3 岩谷勝利「御陵跡近傍跡地表査定（3）天城塚古墳」（福岡県文化財調査報告第51号）

4 柳沢一男・山崎裕哉「進入人・二重環濠溝渠式文化財表査定」（福岡県文化財調査報告第52号）：1980

5 小出忠雄編「六女古墳群調査報告」1～3：1968～1972

6 田畠一義「平行する複層環濠塹、熊本県人野原古墳出土品」

岩谷ら著述した。

7 広瀬和也「群集墳研究の一説」（古代研究？）：1975

参考論説：『古代研究』15：1978

註 8 谷田敏恵「高崎山古墳」『今後バイパス開通地域文化財調査報告』

第 1 頁：1970

9 谷田敏恵「高崎山古墳調査」（福岡県文化財調査報告 第67号）：1980

10 佐田茂也「北九州における群集墳の移行」（九州文化史充研究所紀要 第25号）：1988

11 例えば、香椎・京都平野での石塚山古墳から始まる系譜で、後醍醐天皇古墳がある。

12 白石太「畿内の大型墓群に関する一考察」（古代学研究）2：43～51号）：1966

13 大津正三「山崎式古墳を中心とした近畿の分野」、柳沢一男「播磨平野を中心とした古墳と葬送について」『古石古墳群』所収 1977

14 芦川文雄「北4文化の古墳群分布と地名表」、二郎九古墳群のデータを加えたもの。

15 木暮達三「金武古墳群古式1群」～8号墳、乙石日群1号塚出土鉄器の調査」、註 3 文部省所蔵

16 小田原京雄著「金武古墳群」：1973

## VI おわりに

以上の報告と述べたところから、装飾古墳 K-7号墳出現の意味に触れてまとめよう。

K-7号墳の壁画装飾は、赤一色で描かれた溝文・同心円文・人物像それに縁取り様に配かれた帶状の曲線文で構成されている。帶状曲線文は類例に乏しくよくわからないが、溝文・同心円文・人物像といった图形のモチーフは、いかにも筑後式ともいえる構成である。K-7号墳壁画装飾の主文（中心飾）となっている图形はいくつかの表現手法のみられる溝文であり、日の出→王塚→太田・珍敷塚→丸山塚・塚花塚→重定古墳という歴史手文・溝文の图形・構図推移のなかに位置付けることができる。ところで、壁画描写といった作業は誰、もしくはいかなる集団がおこなうのであるか。上記のように、文様图形・モチーフなりが、個別古墳をこえて一定性をもち、またアレンジされながら描かれる事実は、その点に特定の直師（集団）の存在が想定されるのではないかだろうか。

早良平野の群集墳の一系に、突如ともいえる壁画装飾の出現は、こうした直師（集団）の存在を抜きにしてありえないと思われる。具体的に述べるならば、K-7号墳の壁画装飾は、被葬者もしくは古墳造営主体と直師（集団）、あるいは彼（ら）を統括する集団との直接・間接の交渉の結果描かれたと推測される。そこには、いまの私達には理解の範囲をこえた、多くの人々の動きがあったにちがいない。考古学的に明らかにしていく範囲は限られていると思われるが、装飾古墳の多様性と共通性を媒介にして、より豊かな装飾古墳論を創出していくことが今後の課題といえるのではなかろうか。

# PLATES



(カット) K 7号墳 羨道から奥壁を見る



P.L. 1  
吉武K群遠景



西から▶



南から▶



東から▶



P.L. 2  
K6号墳



墳丘(北から)▶



▲  
石室前壁



石室奥壁▶



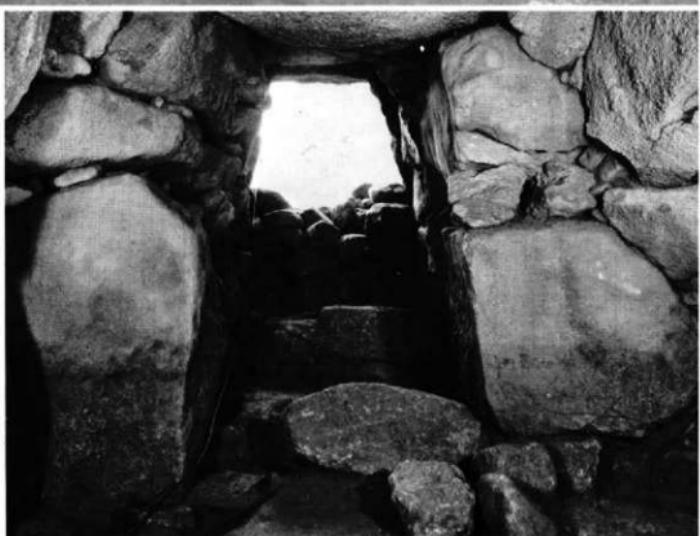
P.L. 3  
K7号墳



石室入口部▶  
正面  
(東から)



石室入口部▶  
側面  
(北東から)



石室前壁▶  
と閉塞部



P.L. 4  
K8号墳



墳丘▶  
(南から)

石室前壁▶



玄室床面仕切石





P.L. 5  
K9号墳



墳丘  
(南から)

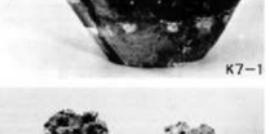


石室奥壁▶



石室前壁▶





K6号墳

K7号墳



福岡市

重要遺跡確認調査報告書 I

—装飾古墳・吉武K7号墳—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第68集

1981年3月31日

発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神1-8-1  
印刷 秀巧社印刷株式会社